
物の怪日和

フサフサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物の怪日和

【Nコード】

N3340Y

【作者名】

フサフサ

【あらすじ】

頭頂部が薄くなってきた三十路間近の独身男、そのダメな日常、人生を赤裸々に駄弁る日記風小説です。

河童と言われムキになって反論したり。

むしろ認めてみたり。

妖怪臭を発する悪友どもと七転八倒したり。

男地獄に落ちて悶絶したり。

あまりにもふがない人生に涙を流したり。

誰に対してしているかわからない自己弁護したり。
毛が抜けたり。

FC2小説というところで公開していたものに加筆修正をしアップしております。

麒麟・天狗・河童

かつて麒麟児と呼ばれた子供がいた。

生まれた頃から頭脳明晰、小学校での成績は極めて優秀。

小学校の読書感想文では文部大臣賞を受賞したこともあった。

末は博士か大臣か、周囲の期待は極めて大きかったであろう。

中学に入ると麒麟から天狗に変化し、鼻高々のクソガキとなった。

同級生、教師構わず口論をし、そのことごとくを打ち負かした。

成績の方はというと、小学校の頃ほどではなかったが優秀といえた。

「ム力つくけど優秀」、というのが大方の評価といえた。

その天狗は、高校そして大学と進学をするにつれ、その高い鼻が邪魔をし勉強をしなくなっていた。

勉強時間の減少に比例し、それまでの優秀さはなりを潜め、成績は徐々にそして確実に地べたへと近づいていった。

彼は麒麟児の栄光を自分の中で守るため、更に天狗の鼻を雄々しく伸ばしていった。

しかし世の人々はそういう者を、「鼻持ちならぬヤツ」と呼び、特に付き合おうとは思わなくなる。

それでもなかだからなのか、彼の鼻はどんどん、そびえ、高くなっていた。

彼には過去の栄光、麒麟児という高名を、そう簡単には拭えなかつ

たのである。

「俺は普通の人とは違う。」

それは彼の心の呟きであった。

その天狗が就職した時は、俗に言う就職氷河期であった。

彼もそのあおりを受け、大学卒業が目前に控えても就職先は決まっていなかった。

確かに時勢もあつたが、その高い鼻が何よりも邪魔をしていたのも事実であつた。

彼は理想ばかりが高かつたのである。

しかし彼は就職の決まらない辛さから、断腸の思いで天狗の鼻をバツキボツキと折り理想を諦めた。

そしてなんとか製造業を営む企業に内定をとりつけた。

しかし就職してからも、天狗の鼻は未だ彼の邪魔をしていた。わかりやすく言えば、仕事が全くうまく運ばなかつたのである。

バツキボツキと折つたといえど、普通の人に比べれば依然鼻っ柱は高かつたのである。

当然上司には疎まれ、同僚とはソリが合わず、取引先ともうまくいかない。

社会の荒波に揉まれ、天狗の鼻っ柱は更にボツキボツキと折れていった。

月日は流れ、その天狗は日々総務で汗を流す三十路間近の男となった。

役職は緑化責任者代理補佐。

主な職務内容は、工場内の草木に水の散布。

分かり易さこの上ない閑職である。

プライドと現実の軋轢のせいかな、それとも遺伝の法則か、その男は若くして頭頂部が薄くなり始めた。

このままずんずんと突き進めば、もう10年も経てば立派な河童となるであろう。

古今東西、妖怪物の怪の類は数あれど、四半世紀ほどで麒麟、天狗と変化し、さらに河童となる例はそれほど多くはないと思われる。いや、それとも麒麟は河童になる運命なのであるのか。妖怪漫画の大家であっても驚嘆する事実に違いない。

さて、ここまで読み進めていただいた御仁には、その河童が私ということは自明であろう。

わかって欲しくないのが本音ではあるが。

果たして私は「普通の人とは違う」ということを、妖怪変化になることで証明してみせた。

しかし過去を振り返りそして現状を鑑みれば、「これならば普通の人がよかった」と切に思う。

更に追い討ちを掛けるかのように、私の近しい人々は妖怪変化、その片鱗を見せる者たちがやけに多いのである。

一体全体何故であろうか、妖怪同士はひかれ合う運命だ、とでもいうのだろうか。

狐・狸

物の怪どもの一例をあげる。

大宮、高島という女性2名の話しよう。

2人とも当年とって20代半ば、という妙齡の女性たちである。

大宮は長身でスラッとした体型の女性である。

見ようによっては、モデルさんのように見えるかもしれない。

そして、キツネのような艶やかな髪の毛と、細いつり目が特徴的な女性である。

対して高島は、小柄で若干ずんぐりとした体型である。

そのフォームは、背が低いというよりも、背が短い、といったほうがしっくりと来る。

そしてタヌキと間違えるほど、目の下のクマが濃い。

彼女と知り合った人は、ほとんどの場合ユーモラスな印象を受けるだろう。

女性をカテゴリー分けする無礼を承知で言えば、大宮は「綺麗な人」、高島は「かわいらしい人」と分類される。

さて、私が2人に会ったのは今から半年前のことである。

ひどい出会い方をしたので、ことさら忘れられない過去といえる。

ある統計によると私の住んでいる町は、鉄鋼製品の生産量日本一のことである。

そのため、鉄鋼に関わる大小様々な工場が多く建ち臨んでいる。

またそこに勤める工場職人を当てにしているのか、バーやスナック、居酒屋が極めて多い土地柄であり、ひいては酔客の一大産地でもある。

飲み屋に限らないが、同じ商売の店が多ければ、競争が激しいのはこの世の常だ。

まさに弱肉強食。

そして、熾烈な競争に勝ち残る手段として、酔狂なことをやり始める店も当然のように存在する。

そんな店の一つに、自然映像をでっかいモニタで流しているバーがあった。

壁には大きなテレビモニターが掛けられており、ゆるい音楽と風光明媚な景色を提供するのである。

酒だけでなく、癒しを提供するのがその店のとった営業戦略であった。

川のせせらぎ等を見ていると、とても心が安らぐ。

仕事で疲れた私には、大自然の雄大さが必要なのである。

オーナーも初老の男性で、数千年を経た屋久杉のような深い優しさと慈しみを感じさせる紳士であった。

そこは私にとってなんと居心地がよく、すなわち好んで通いつめ

ていた。

私はオーナーの営業戦略、その術中に見事にはまったのである。

そのバーの名前はというと、「風光明媚」という。
おそろしくダサイ名前であった。

そして、その「風光明媚」で、前述のキツネとタヌキとの奇縁が生まれてしまったのである。

半年前のその日、いつもどおり私は、バー「風光明媚」にいた。
マスターと話すわけでもなく、トマトジュースとビールのカクテル、
レッドアイなんぞをチビチビと呑んでいた。

その時の私は、翌日から3日間の有給休暇をとっており、いかに有意義に過ごそうかと考えていたのである。

休暇の前日、社会人にとっては至福の時であろう。

そんな至福の時真っ只中、突如やってきたのがキツネとタヌキであった。

2人はなにやら私の聞いたことの無いカクテルを注文していた。
そして、出てきたそれを、ゆるゆると口に運びながら、モニターを見てぼーっとしていた。

今思えば、精神を開放していたのかもしれない。
仏教で言う空の心である。

しかし程なくして、どちらとも無く口を開き、会話が始まった。年頃の女性らしく、恋愛の話だとか仕事の愚痴だとか、ともかく話のネタは尽きないらしい。

私自身の名誉のために言っておくが、私は聞き耳を立てていたのではない。

店にいるのは、マスターと私、そして今入ってきたキツネとタヌキだけである。

お世辞にも数は多くない、つまり話し声自体が少ない。

単純に彼女らの声が大きいので、嫌でも耳に入ってしまうのだ。

そして、不幸は突然運命を絡めとる。

ああ無常。

ここから先は身の毛もよだつ話であるため、箇条書きにて失礼する。決して書くのが面倒だからではない。

画面にうつるキツネ。

タヌキがキツネに何かを呟く。

突如大声で怒り出すキツネ。

してやったり顔のタヌキ。

やおら飛び交うイスとビンタ。

何故か、とばっちりでイスを食らう私。

キツネが嘶き、タヌキは鳴き出す。

赤銅色の鬼が1匹出現、どうやらオーナーである。

髪を引っ張られ著しく河童化が進む私。 またもやとばっちりを食らう。

正座するキツネとタヌキ、そして腕を組み地を踏みしめ、2人を睨みつける赤銅色の鬼。 まさに仁王立ち。

うつむき茫然自失の私。

何かを書かされ店を叩き出される2人、そしてその2人に迷惑料代わり、と食事に誘われる私。

そう、これがこの2人との縁の一部始終である。

悪縁奇縁は多々あれど、ここまで酷い縁は見たことも聞いたこともない。

しかも出会ったのが、何の冗談か河童とキツネとタヌキ。

民俗学者であれば、手を叩いて喜びそうな取り合わせである。

その後、私は、2人と幾度か一緒に呑んだり食事をするうちに、2人の色々な話を聞くことが出来た。なんでも幼稚園からの同級生とかなんとか、まあともかく付き合いは長いらしい。

いわゆる親友同士ということか。

結局、この2人は仲がいいやら悪いやらで、バー「風光明媚」での1件も、よくあることに過ぎないらしい。

誠に迷惑千万な妖怪どもである。
むしろ妖怪物の怪というよりも悪鬼羅刹と言った方が言葉として正しいとさえ思える。

ところで、喧嘩の理由で最も多いものは同じ男を好きになってしまった、ということだそうだ。

おりしも風光明媚での悪縁より2ヶ月後、キツネとタヌキにより（わが友人）笹山の争奪戦が行われた。

ご都合主義的展開といってしまえばそれまでであるが、事実なのだからご勘弁願いたい。

さて笹山について大雑把に記す。

笹山は私よりも1歳年下で、大学の後輩にあたる。

美形とは言いにくいが、目鼻立ちの整った、いい男である。

昭和の香りがする好男子、といえわかりやすいだろうか。

そして、なかなかの長身で細身の体型をしている。

さらに勤め先は銀行で、将来はなかなか固い。

こんな笹山は、いわゆる結婚適齢期の女性にとっては格好の獲物であろう。

2人はひよんなことより笹山と出会い、恋に落ちた。

そしてどこから嗅ぎ付けたものか、私が笹山の先輩にあたることを嗅ぎつけた。

野生動物の嗅覚と強引さはすさまじいものであり、あれよあれよという間にみんなで呑みにいこうとなった。

ここで私が犯した愚は、風光明媚での1件を失念したことである。人間とはかくも過去に学ばないものなのであるうか。

呑みの当日。

待ち合わせ場所である某駅改札前。

私と笹山は早々に到着し、他愛も無い雑談をしながら、キツネとタヌキを待っていた。

すると、不意に後ろから声を掛けられた。

振り返るとそこには、なかなかの美女が2人もいた。

これは逆ナンパというやつかと、私が妄想たくましくしていたが、美女2人の声にも聞き覚えがあるのだ。

美女達の声を注意深く聞いて、私はやっと正解がわかった。

正体はキツネとタヌキである。

私はその事実気づくまでにかかった時間は、ゆうに10秒を超えていたであろう。

しかし見れば見るほど全くの別人である。

キツネの目は普段の切れ長の目ではなく、大きくパツチリと開いた目に。

そしてタヌキにいたっては体型が私の記憶と大きく乖離している。

私はその余りの驚愕の事実思わず口が半開きになっていた。

それにしてもキツネにつままれるという言葉があるが、タヌキにもつままれることが有るとは知らなかった。

実際、化粧でここまで変わるのか？とも思っただが、私は、これは化粧だけで成せる技ではない、と断言したい。

多分葉っぱを頭の上に乗せてバク転1回、ドロン！という音とともに、変化したに違いない。

まさに現代に蘇る民話、御伽噺。

民話の葉っぱを現代語に訳すと化粧品とコルセットに変わるようである。

時の流れと技術進歩はかくも恐ろしい。

口を半開きにしている私をよそに、2人は笹山に擦り寄り親しげに話しかけた。

無論笹山もまんざらではない。

物の怪が変化しているとはいえ美女2人に囲まれているのである。嬉しくない男はいないだろう。

そんな笹山の精神状態と相反するように、取り残された私の精神はそれはもうささくれ立っていった。

確かに美女2人に囲まれる笹山は羨ましい。

しかしなによりも腹立たいのは、2人は私の前では今日のような（変化とも言うべき）化粧をしてきたことなど、一度も、ただの一度も無い、という事実である。

会場である居酒屋までの道のりを4人で歩いた。

正確には、3人と1人で歩いた。

私の孤独感は瘴気となり、まわりに噴出されていたかもしれない。

私の肩から背中から、黒いモヤのようなものが噴出され、世の中を暗闇で満たすのである。

世界を闇で覆いつくせ！

残念ながら私も良識ある社会人である。

そこまでで想像を留め居酒屋までの苦難の道のりを歩んだ。

しかしやはり眼前の事実だけは拭い難く、地獄の閻魔も裸足で逃げ出すような形相だったことを明記しておく。

実を言うと私は、この飲み会での記憶を殆ど持っていない。
その理由の半分は、酔いすぎた、からである。

確かに飲んでいないとやっつけられなかった。
何よりも、当時の私が記憶を封印したかったに違いない。

記憶を壺に入れ、蓋をして、有難いお札を張り、鎖でグルグル巻きにして海に沈め、止めに念仏の大会唱。
このくらいの気概で記憶が封印されているのである。

おぼろげながら残っている記憶では、酔っ払ったタヌキが私の髪の毛をつかんで引き抜いていた。

私がまた一歩、しかし確実に河童に近づき、その後色々あって笹山が悲鳴をあげて逃走し、唐突な幕切れを迎えた。

残されたのは、キツネとタヌキと私、壊れた店の備品とオロオロする居酒屋店員さん。

ただそれだけである。

こう思い出してみて、むしろ一番封印すべき記憶をやけにハッキリと覚えている気がしてならない。

もしも願いが叶うなら、過去の自分と問い詰めたい。

お前は阿呆か、いや阿呆だ、と。

過去の自分が阿呆だと未来の自分が困るのだ、と。

さて、2人との出会いそしてその後を思い返してみて、私には段々と暗く重い、怒りの情念がフツフツと湧き上がった。
得たものは無く、失ったものは時間と幾ばくかのお金。

そして髪の毛。

地獄の鬼でもここまで無体、法外なことはいらないであろう。

これは山にでも籠って仏法、法力を修め、この魍魎魍魎、はたまた悪鬼羅刹とも言つべき妖怪2匹を退治せねばならん、と思い至った。

しかし、ただ一つ懸念がある。

仮に私が仏法、法力を修めたとしても、あの妖怪2匹に勝てる気は全くしないのである。

故に今回は山に籠るのを止めておき、代わりにキツネとタヌキに、悪戯メールをしこたま送っておくだけに止めておく。

化け猫 その1

河童の住処といえば、川や湖沼の底と相場は決まっている。しかし私は、極々一般的な家屋に住んでいる。

これは私が河童ではない確固たる証拠といえる。

少し私の家をご紹介します。

2階建てであり、和室が4部屋とキッチン、そして風呂などの水周りがある。

不動産屋に言わせれば、4DKというものらしい。

ここに私は1人で住んでいる。

同居者はおるか、犬・猫・ネズミ・霊もない。

念のために申しておくが、未だ両親は健在である。

しかし一昔前に流行の田舎暮らしとやらに憧れ、去年父の定年退職を期に南の島に移住をしてしまった。

それが私の1人暮らしの理由である。

1人暮らしで4DKというのは甚だ広く、なにより掃除が大変である。

孤独を感じることも多く、家の広さがそれをさらに加速させていく。

30手前の成年男子が、寂しさで泣き崩れる絵は些かみつともない。その有様は悪鬼悪霊魑魅魍魎すら呼びかねない、と冷静に判断し、主に1階のみ使用している。

以前は2階も細やかに換気や掃除なんぞをしていたが、やはり面倒になり、ここ1ヶ月ほどは立ち入っていないというのが現状である。

さて、そんな我が家で迎える土曜日、それが今現在の状況である。諸兄ご存知のとおり、社会人にとって土曜日とは安息日である。

魔女の釜で煮られる様な仕事から解放される日、お釈迦様が地獄にたらしめた一本の蜘蛛糸、それこそが土曜日なのである。

おりしも天気はよく、行楽、買い物、はたまた黒髪とメガネが似合う読書好きな女性とのデートと、なにをやるにもうってつけの日柄である。

また街もセールやイベントも数多く行われる。

夜ともなれば街には沢山の人があふれ、華やいだ雰囲気になるものだ。

エキゾチックな恋に酔いしれることも、運命の出会いに心ときめかす御仁も多いのではなからうか。

平日休みの方には申し訳ないが、私はこの土曜日の楽しさ、ワクワク感というのは、何ものにも変えがたいと思っている。

そんなことを考えながら、私は居間でテレビゲームに興じていた。

30に片足を突っ込んだいい年の男が、外にも出かけず、昼日中から部屋に閉じこもり、あまつさえ女性の影なぞ微塵も感じさせずに、煎餅に齧りつきながらテレビゲームに興じ、「ぬおっ!？」などと発している有様を、皆様はどう思われるだろうか。

ここはあえて、強く断言させていただきたい。

私はとても楽しい。

これぞ土曜日の醍醐味である。

そぞろテレビゲームに熱中し、時がたつのを忘れていた。
なお、繰り返し申し伝えるが、私は土曜日という安息の日を、これでもか！これでもか！というほど満喫しているのである。

そんな私の背中に、何者かが刺すような視線を送るのを感じた。
それを感じた私は、出来れば黒髪の乙女であって欲しいと切に願った。

しかしそれはそれで不法侵入者であり、願ったとはいえ身の危険を感じるので妄想を思いな直した。

なんとか黒髪の乙女は止めていただきたい。

だからといって、覆面をした男は尚更やめていただきたい。

不法侵入者では無いことを祈りながら振り返ってみると、黒い塊がどかんと鎮座していた。

私は黒い塊がそこにある違和感と、覆面をした男で無かった安心感と、黒髪の乙女で無かった失望感がいまって時間が止まった。10秒ほど経過すると、時間がまたゆっくりと動き出した。

再度時間が止まらないうちに、私は黒い塊の観察をし、現状把握をすることとした。

この黒い塊には目や口、耳がついており、全体的に毛だらけ毛むくじらのようである。

つまりは生物のようである。

記憶のなかで最も近い生物を探してみると、どうやらこれは猫のようには思われる。

即座には猫と断定できないのは、それがあまりにも巨塊だから、という理由による。

この巨塊は9割がた猫であろう。残りの1割はミュータントである。しかし考えあぐね、可能性だけを論じていても埒は明かない。人はどこかで埒をあげ、決断をしなければ前へ進めないのである。人生もまた然り。

ゆえにこの巨塊を、勇猛果敢に猫であると断定し話を進めることにする。

取り急ぎ、より一層の観察を試みる。

たつぷりと2抱えはあり、威厳すら漂わせる堂々たる体躯。

その巨軀より放たれる風格は、半世紀は生きていられると言われても、諸手をあげて納得せざるを得ないほどである。

尻尾なぞ猫又よろしく2又なんぞは優に超え、糸こんにゃく状になっているが、歩くのに邪魔なので1塊りにしている、それほどの太さである。

私の観察に気づいたのか、私と巨猫の目が合い、さながら睨み合いの様相を呈していった。

私をしっかりと見据える瞳は、おおそ猫が発するであろう可愛らしさ、愛らしさを微塵も感じさせない。

むしろ私が値踏みされている心持になるような、いささか鋭すぎる眼光である。

その視線は、大仏に似た某占い師を髣髴とさせ、いつ地獄行きを宣言されるものかと、肌寒くなったほどだ。

巨猫と私の壮絶を極めた睨み合いは、一進一退、竜虎相食むが如くであった。

いや、まったく身じろぎはしていないので大嘘である。

果たして、どのくらい睨み合いが続いたのであろうか。

唐突に巨猫はぷいっと、後ろを向き、悠々と尻尾を天にむけ、この場より立ち去った。

私は巨猫との勝負に勝ったか負けたかは分からないが、一つ確実にいえることは、地獄行き宣告は免れたようである。

ほつと胸を撫で下ろし、私はゲームにまたも没頭するべくテレビに向き直った。

しかし、ある違和感を感じ、頭を回転させることにした。

そして数秒ほど頭を回転させ、私はその正体にようやく気がついた。

違和感の正体は、猫を飼っていないのに家に猫がいる、という事実であった。

この事実には私は愕然とした。

不埒な巨猫が、家主である私に無断で侵入し、心休まる土曜日を邪魔し汚したのである。

なお、断りがあつたら入ってもいいのか、と問われたら、若干お時間を頂きたい。

それにしても、明らかにあの猫は大きすぎた。

私は猫博士ではないが、猫よりも織物工場にある毛糸玉の方が近そうである。

もはや工業製品であり、しかも規格外で生産ラインにはのらない類の。

私は、猫が大きすぎるという違和感には気づいたが、我が家に猫がいるという根本的な違和感には気が付かなかったのである。
なんというミスディレクションであろうか。

その手際は、かの高名な大泥棒、手品師もびっくり、もはや魔術妖

術の類である。

なので決して私がボンクラというわけではない。

しかしこのまま猫を野放しにしているのは、家の中が毛だらけになるやもしれぬ。

糞尿をまき散らかされ、来訪者より変わった性癖の持ち主、とレッテルを貼られる事態になつては、生きてゆくことが難しくなる。

自分の毛が抜けたと思い、暗澹たる気持ちになり夜中一人呻く可能性も捨てがたい。

すわ一大事である。

私はゲームを一時中断し、巨猫を捕獲すべく山狩りならぬ我が家狩りを行うことにした。

猫め、目に物見せてくれようぞ。

私の土曜日を邪魔した罪は大きいのだ。

ともかく何事も計画、段取りが一番大事である。

即ち、我が家狩りのための作戦を練らねばならぬ。

まずは現状把握である。

私の家は4DK。

1階に2部屋と台所、そして2階に2部屋。

玄関のすぐ右側には2階に上がる階段があり、階段の脇には寝室に

入る扉がある。

廊下は奥まで伸び、行き止まりに台所。

廊下の途中には居間と水周りへのドアがある。

トイレと風呂は1箇所にとまっている。

そして台所に勝手口は無い。

2階は私の自室だった部屋と両親の寝室であった部屋で、1ヶ月前より開かずの間のである。

さて、まずはどこから開始すべきか。

ともかく私は、侵入経路を第一に探すことにした。

猫を追い出してもまた侵入されてはイタチゴッコに他ならないからだ。

侵入経路としてはどこが可能性が高いであろうか。

私は猫の気持ちになって考えてみることにした。

しかし私は猫ではないため、全く想像もつかない。

猫の気持ちは猫にしかわからない。

私は、猫の気持ちを理解するため、一寸鳴き声でも出してみようかと思った。

しかし30前の男が猫の鳴声を出す、そのあまりの気味悪さは、巨猫だけではなく、さらに強大な魔物と呼びそうである。

私は冷静かつ客観的、合理的判断をして、中止することにした。

よくよく考えれば、私がわざわざ猫の気持ちになる必要などないではないか。

人間には人間にしかない道具を使えばよいのである。
ここは一つ知恵を使い、論理的に考えることにした。

猫は動物である。

これは確固とした事実であり、大前提である。

動物の行動をオーソドックスに考えれば、優先順位として食料確保が高いはずである。

つまり台所か。

まず私は台所を搜索することにした。

私は台所に到着し、しげしげと室内を眺める。

台所の窓という窓は閉じられており、進入された形跡は見当たらない。

しかし私は冷蔵庫が空いていることに愕然とし、冷蔵庫から黒くて巨大な塊が生えていることには驚愕を覚えた。
どう見ても、あの巨猫である。

しかし果たして、猫というものは冷蔵庫を開けるものだろうか。
巷の噂によれば、冷蔵庫を開けることは人間でなければ難しいと聞く。

もしや、やつはただの猫では無いかもしれぬ。

その巨軀に見合った、化け猫では無かろうか。

この巨大な塊の残1割の可能性はミュータントであったが、まさか妖怪であったとは。

改めて、妖怪に身にやつたものは妖怪と引かれあうのであろうか、と思う。

物語の化け猫は行灯の油をなめていたというが、今生の化け猫は冷蔵庫より中身を喰らうのである。

確かに今の時代、行灯なぞ、日光江戸村か太秦映画村くらいにしかないのではないか。

化け猫もひもじい思いをしなくてはなからう。

物の怪もやはり時代とともに変化するのであろうか。

なお、ここまで朗々と語っておきながらなんであるが、私が冷蔵庫を閉め忘れた可能性には目をつぶっていただきたい。

さて私は化け猫を捕獲するべく、身をかがめ腰を落とし、にじり寄った。

カバディをご存知の方は、そのスタイルをご想像いただきたい。

化け猫はこちらに気づいたのか振り返り、そして動きがとまった。口からは鰯のヒラキが生えている。

私の晩飯である。

私はフツフツと、暗い怒りの情念に支配されていった。

頭に水をたたえた皿があれば、一気に乾くほどの強い怒りである。

この怒りは秩序を逸脱した、猫の無礼かつ無秩序な振る舞いに対してである。

給料日前に晩のおかずが無くなったことに対しても、まあ多少はある。

腰を落とし、臨戦態勢でにじり寄る私と、私をしつかと睨む化け猫。戦闘開始はもう目前である。

化け猫の出方を予想しなくてはならない。

そう、ここで人間の武器、知恵と論理の再登場である。

おそらく化け猫は私の横を通り過ぎようとするであろうから、そこを捕まえるのは難しくないのであろう。

もし股下を抜けようとするなら、足を閉じて進行方向を塞いでしまおう。

すると左右どちらかに逃げるであろうから、やはり対応はそれほど難しくない。

なによりあの巨体である。そこまですばやく動くとは考えにくい。論理的に考えても、私の勝算は極めて高いのだ。

見事な作戦に、私はほくそえんだ。

にじり寄る私。

さらににじり寄る私。

ほくそえみながらさらににじり寄る私。

これでは私の方が妖怪である。

さて、化け猫の体に緊張が走ったのがわかった。

戦闘開始はもうほんの数瞬後のことだろう。

しっかりと体を反応させなければならぬ。

この時、私は傲慢にも自分の勝利を確信し、油断していたのかもしれない。

古来より油断大敵というが、それをまさしく身をもって体感した。

やはり先達の言葉は正しいのである。

まさか化け猫がまつすぐこちらに走りより、そのまま顔に向かって飛び掛るとは予想もしていなかった。

私は「ぬぶあ！」という叫びを上げ後ろに倒れ、その上を黒い塊がすごい勢いで走り去った。

私は身じろぎすることも出来ずにそれを見送り、階段をドタドタと上っていく足音を頭上から聞くのみであった。

人というものは、突発的な恐怖には体が固まるという。それを聞いたときには、まあそんなものだろう、と曖昧に納得した。しかし、自分自身が身をもって体験した今、その曖昧さは霧散し、確固とした納得を得ることとなった。

皆様にも想像してもらいたい。

得体の知れない黒い巨塊が自分の顔に向かって、猛烈な勢いで走ってくるのである。

その驚愕と絶望感は、怒りに駆られた私の精神を木っ端微塵に粉砕したのも納得いただけたことであろう。

人間の精神とはかくも脆いのである。

ただし、「ぬぷあ！」と発するとは思わなかった。

化け猫が走り去った台所には、倒れた私と、見るも無残な姿となった鯨のヒラキが残された。

鯨のヒラキの瞳が、恨めしそうに虚空を見つめていた。

化け猫 その2

頭を振り気を取り直した私は、怒りを通り越し復讐心に心を奪われた。

化け猫にはその身にミツチリと教え込んでやらねばならぬ。

食い物の恨み、そして食費が無駄になった怒りの恐ろしさを。

ただし動物愛護法の範囲内で。

さて、私の頭上より鳴った音を頼りに考えれば、化け猫は階段の上に走り去ったと考えられる。

次の戦場は階段、そして2階である。

ずんずんと歩き、果たして私は階段にたどりついた。

そして、やはり奴はいた。

段上より私を見下ろすは、私に仇なす化け猫。

目ばかりがギラギラと異様な輝きを放っている。

私の非力さを蔑んでいるのであるうか、それとも哀れんでいるのであるうか、目にはそんな光が湛えられているように感じられる。

鋭い眼光に負けここで引き下がっては、人間の尊厳など朝露のごとき儚いものと証明するようなものである。

断じて引けぬ。

引いてはならぬ。

戦わねばならぬ。

私が1段2段と階段を上るも、化け猫は身じろぎ一つしない。3段に足をかけたところで、化け猫に体に緊張が走ったのがわかった。

どうやら3段目が境界線のようにある。

一刻も早く化け猫を退治したいところではあるが、先ほどの二の舞だけは避けなければならない。

ここは慎重に知恵を巡らせなくてはならない。古来より化け物を成敗する人間は、知恵と勇気をもって戦うものである。

ここで私は一計を案じることにした。

その発想に、腐っても麒麟児神童と謳われた才媛、と、自分を褒めてやりたくなった。

ありがとうお父さんお母さん、息子は立派にやっております。

またもや論理的思考である。

さて、化け猫といえど猫である。

猫の習性を考えてみれば、ここで私が追うと逃げ2階を縦横無尽に駆け巡る。

もしくはこちらに走り出でて、私と肉弾戦の様相を呈するかもしれない。

要は先ほどと同じ結果になる可能性がある。

最悪、またも顔に飛び掛られ「ぬぶあ！」と発し、階段より転げ落ちたり、さらに1階に逃げ込まれ、家中を蹂躪されるかも知れぬ。発する音が口から「ぬぶあ！」ならまだよいが、首から「ゴキヤ」では目も当てられぬ。

ここは階段、危険地帯である。

しかし、ここで発想を逆転させてみよう。
私が一旦退けばどうだろであろうか。

化け猫は私という最大の脅威が去ったと思い、2階より降りてくるやもしれぬ。

いや、いずれは降りてくるより仕方ないのである。

なぜなら2階には、鯨は元より食物など一切無い。

これは一種の兵糧攻めであり、勝利のための戦術的撤退である。

兵糧攻めがうまくいき降りてきた場合どうするか。

普通に捕まえるのもよいが、それではまたもや逃げられる可能性もある。

そのため別の案を考えなければならない。

考えた結果、玄関を開けておき、降りてきたところを外に追い立てるのがよいと思われる。

妖怪物の怪を捕まえることが出来ないのであれば、悪鬼退散させるもの1案であろう。

悪魔も退治ではなく、退散させるというではないか。

化け猫の脅威を外に放出するのは気が引けるが、これも我が家の安泰のためである。

私が安心してゲームをし、土曜日を満喫するためには致し方ないのである。

許せ、ご近所の皆様。

早速作戦が決行された。

やることが決まれば後は実行するだけである。

階段の横にはダンボールでバリケードが築かれ、化け猫が降りてくれば玄関より外に出るほか道は無くなった。

降りてきたところを脅かしてやれば、さらに確実に玄関に一目散であらう。

私はほくそえみながら、階段横、ダンボールバリケードの後ろに隠れ、猫を待つことにした。

どれほどの時が経過しただろう。

優に1時間はまったであろうか。

待てど暮らせど、猫が階下に下りてくる気配が無い。

はたして私の怨念が放出され、化け猫がそれに気付いているのだろうか。

敵もさるもの引っ掻くものである。

程なくまた1時間ほど経過した。

しかしやはり待ち人來たらず、である。

待ち人が、若い黒髪とメガネの似合う、読書好きの女性であれば、期待に胸膨らませ、12時間くらいなら待ち続けられる自信もある。しかし今は待ち人ではなく、待ち猫であり、さらには猫であることすら危うい化け猫である。

妄想と現実の共通点は、黒い毛をもっていることだけだ。こう考えると期待に胸膨らむどころか、虚しさに胸が萎み、腹が減るばかりである。

さてどうしたものかと思案している最中、ふと玄関にキュウリが立っていることに気が付いた。もとい、キュウリ酷似した人間が立っていることに気が付いた。

年のころは、私とほぼ同じくらいである。

長身瘦躯、いや、むしろ細長いという言葉がしっくり来るシルエット。

顔もやたらに細長く、さらに顔色が恐ろしく悪い。

生まれ故郷は金星です、先週地球に来て日本語を勉強しています、といわれても、この顔色ならばなるほど説得力がある。

人はかくもここまで不健康な顔色になれるものか、と感動すら覚える。

そしてうつすらと顔に吹きで物がある。ブツブツと。

もし10人に、この男にあだ名をつけて欲しいとお願いしたら、

9人はキュウリと答え、残りの1人はしなびたキュウリと答えるだろう。

しかし彼はキュウリなどではなく、貧乏神である。

しかも、さらに不幸で残念なことに、私の古くからの友人である。

だからこそ、ここまで酷い紹介が出来るのであるが。

この貧乏神の話は後に回すとするが、ともかく碌でもない時に友人がやってきたのである。

彼はこちらを怪訝そうに眺める。

まあ、いかに友人といえどこの有様をみれば、怪訝な顔をするであらう。

玄関は開け放たれており、ダンボールでバリケードを作り、その影からいい大人が階段の上をしきりに気にしているのである。

ダンボールの影にいるのが小学生であれば、戦争ごっこでもしているようで、ほほえましい光景と見えるかもしれない。

しかし、ダンボールの影に隠れているのは、小学23年生であり現在河童である。

しばしの沈黙の後、彼は私に、「何をやっているんだ？」と尋ねてきた。

微かに声が震えているのが認められた。
声の振るえだけでは混乱しているのか、それとも笑っているのかは
判然としない。

私はとにかく今の状況をわかってもらうため、こと細かに状況伝えることに力を注いだ。

巨大な猫が私の家に入り込んだこと。

そやつに2階を占拠されていること。

これは猫を追いつ作戦であること。

私が特に妙な信仰を持ち始めたとか、薬物に手を染めたりはしていないこと。

作戦遂行のためには、どうしても張り付いていないといけないこと。

今現在の私は、このような奇天烈なことをしているが、ご存知のとおり普段はこの様なことはせず、静謐な生活を心がけていること。

お願いだから理解してください、そして他言しないでくださいということ。

このような内容を切々と彼に伝えたと、とりあえず納得はしたようで、貧乏神は私に同情する旨をつたえた。

彼はなぜ突然やってきたかは会話にのぼらなかった。
おそらく、暇だったのだろう。

その後、私と彼は他愛も無い話をし、猫が下りてくるまでの時間を潰した。

しかしやはりというか、待てど暮らせど暇にあかせて舞を踊り始めても、化け猫は一向に姿を現さない。

さしにも飽きてきて、さあどうしようか、いい加減突入するべきかと考えていた時である。

貧乏神の「猫はどこから入り込んだんだ？」の一言で、私は背筋に寒いものを感じた。

ううむ、確かにそうではないか。

そもそも私が考えていたことは、化け猫の侵入経路を調査し封鎖、2度とやつが入らないようにすることではなかったか。
状況を考えれば、どう考えても侵入経路は2階である。

私は阿呆か、いや阿呆に違いない。

麒麟も老いれば駄馬にも劣るのである。

自問自答をしながら、私は一目散に階段に向かい、バタバタと駆け上がった。

後ろからは、「おい」と声が聞える。

しかし構ってられるか、貧乏神より今は化け猫である。

2階に上がる途中、猫の姿は見えず、旧自室のドアが開け放たれていた。

猫だ猫。

あの化け猫め、人間様をたぶらかすとはやるではないか。
面妖な妖術をつかいやがって。

決して私が勝手に道化を演じているわけではないぞ。

私は旧自室のドアより部屋の中に踊り入った。

ドン！という効果音が鳴り響いた。

なお効果音は、無論私の脳内の話だけなのであるが。

そこで私の目に映ったものは、蹂躪としか形容の仕様が無いほど荒れ果てた私の部屋。

多数のスズメ、トカゲ、ネズミの死骸、そしてちょうど化け猫が入れるくらいに開いた窓と、突き破られた網戸であった。

さらに糞尿と腐敗の混じった、すえた臭いに鼻腔をくすぐられた。

化け猫の姿はそこにはなく、私はうなだれ膝をつきそうになったが、ちょうどそこに、糞尿があることに気づき、寸のところで太ももに力を入れ踏みとどまった。

もし遙か昔、化け猫騒動が起こった場合、坊さん、神主はどのような

な対処をしたのだろうか。

おそらくお札をはり、部屋の中を塩で清め、更に出入り口にも盛り塩、そして最後に祝詞や念仏を唱え、空間を清めたのではないだろうか。

しかし私は坊さん神主ではない。

頭髪の状態は坊さんに近いものの、僧籍をとった覚えは無い。

とりあえず私は旧自室の惨状、この有様をなんとか清めるべく、使えそうなものはないかと家中を探した。

結果、お札の代わりにガムテープで網戸の穴をふさぎ、塩の代わりに消臭剤を振りまき、出入り口には盛り塩代わりのペットボトルを配備することにした。

これは坊さん神主の技ではなく、ホームセンターの技である。そして止めは祝詞や念仏代わりに掃除機の音を響き渡らせた。

爽やかな汗をかき、作業を終えて一息つきたいと思い居間に戻ると、そこには貧乏神がいた。

しかも勝手に私の煎餅を口に運んでいるではないか。

手元の袋を見ると、たつぷりと入っていた煎餅は残り2枚となっており、貧乏神はそれを、2枚まとめてむんずと掴むと、口の中に押し込んだ。

貧乏神が煎餅を砕く、そのバリバリボリボリという音が不愉快この上なく、私を不愉快な気持ちにさせた。

しかし、貧乏神の顎の強さには素直に驚嘆した。

さて此度に化け猫騒動における金銭的被害をまとめると、鯨のヒラキと煎餅、しめて300円ほどと相成った。

貧乏神・ぬらりひょん その1

はたして、世に語られる神仏悪魔妖怪物の怪とは、いかなる数が存在するのであるうか。

例えば、日本古来の神々は、八百万やおよろずと言われる。
8000000である。

これはものすごい数である。
それだけではない。

海を西に渡った異国では、悪魔の数に兆という単位が飛び出すそうである。

兆までいけば、天文学かニュースにおける国家予算、はたまた駄菓子屋のおばちゃんからお釣りをもらうとき以外では聞くことの無い単位である。

なんとも大きい数である。

他にも太古より語られた民話に、幾万人もの人に信じられる神話に、大量に生産され消費されるマンガに、誰にも読まれなかった小説に、友人の友人から語られる都市伝説に、合宿の深夜語られる噂話に、そこには多くの人ならざるものが登場する。

その中に出てくる妖怪物の怪の合計と、砂漠の砂粒とでははたしてどちらが多いであろうか。

仮にである。

その数多の人ならざる物たちで、「絶対に会いたくないランキング」を行ったとしよう。

皆様、栄えあるNO1は誰であろうと思われるか。

様々なお考えがあるだろうが、私の意見を述べさせていただこう。それは貧乏神ではないかと思う。

命まではとられないとはいえ、貧乏ほど人に忌み嫌われるものも少ない。

金が全てではないとはいえ、やはり無くては困るものである。

また金が無いのは首がないのと同じ、という言葉もあるではないか。

私は断言するが、貧乏神とだけは会いたくない。

さて、その私の中での「出会いたくない妖怪NO1」の貧乏神であるが、先ほど私の煎餅を平らげていた。

この貧乏神、本名は塚田という。

そして前述のとおり、極めてキュウリに酷似した外見の持ち主である。

彼は、この町にある地元中堅建築会社の息子であり、確か今はその会社の役員をやっているはずである。

また、彼の父親が地域のお祭りや催し物の一切を取り仕切る、所謂地域の顔役であり、そこにもちよくちよく顔を出すため、そのうだつの上がない風貌に反して、やけに顔が広い面も持つ。

私とは高校時代のクラスメイトであり、つまりはご立派な腐れ縁といえる。

今までに何度か縁が切れそうな時もあったが、縁がぷつぷつと切れることはなかった。

やはり、河童とキュウリは切っても切れない縁なのであろうか。

さて、己の友人を貧乏神とはなんとも無体な呼び方であると思われるだろう。

しかし私とて、無根拠にこのようなあだ名をつけたりはしない。

塚田を貧乏神と呼ぶのには大雑把に2つの理由がある。

1つは、今現在私の眼前に広がる光景が答えである。

具体的に言つと、家主の許しも得ずにドカドカと家に上がり込み、我が物顔で煎餅を口に運ぶ、その厚かましさである。

他にも飲み会などで皿の上に残った最後のから揚げなどを、躊躇も無く口に運び咀嚼する悪鬼である。

このような厚顔無恥傍若無人唯我独尊なキュウリは、今すぐJAに返却するべきであると思う。

しかし窓口がどこか分からないので諦めることとする。

どなたかご存知でしたら、ご一報頂ければ幸いです。

さて、2つ目は彼が教えてくれる情報である。

もう少し細かく言つと、「有益な情報」と前置きのついた彼の話に

乗ると、碌な結果をもたらさないのだ。

少しわかりにくいので、過去の例を挙げてみよう。

某IT企業の株を薦められれば、10日を待たずにその企業株券は紙くずとなった。

女子がたくさんいる、出会いがたくさんある、と勧誘されたサークルで200万円の壺を買わされそうになった。

これからはこのゲームが伸びる、と紹介され購入したテレビゲーム本体が、半年後には新ソフトの開発と発売が中止となる憂き目を見た。

合コンに誘われれば、以前紹介したの狐と狸が登場し、紆余曲折を経て私の河童化がまたもや進行する。

などなど、その貧乏神っぷりには脱帽せざるをえない。

しかも本人は悪意など微塵も無く、全て善意であるからして尚のこと性質が悪い。

この男ほどありがた迷惑という言葉がハマることも滅多になかろう。

なお彼の名譽のために言っておくが、有益な情報、と前置きがつかない場合は悪くない結果ももちろんあることを追記しておく。ただし、じゃあよい結果の例を挙げろ、と言われても、まあおいそれとは出てこないのだが。

目の前の現実には話を戻す。

本日、この男が我が家に來た理由とは、やはり暇を持て余していたかららしい。
私も人のことは言えないが、全く持って暇な男である。
会社の役員とは暇なものなのであろうか。

しかし古い友人というのは、こういう時に誠に便利といわざるを得ない。
他愛も無い話に花が咲き、時間がどんどん潰れていくからである。
土曜日の昼下がり、河童と貧乏神が向かい合い、私が台所より持ち込んだ煎餅を食べながらの談笑である。
見方によってはどの御伽草子かと思われるかもしれない。

しかし、三十路男が向かい合い談笑、と見方を変えれば地獄絵図に早変わりである。
なんとも痛々しい光景。

そして煎餅は食べきり、またもや私が台所より持ち込んだソフトサ

キイカに変わった。

彼はそれを口いっぱいに頬張り、モグモグギョクンと飲み干した。それにしても、恐るべき顎と喉の強さ、もはや獣の類である。

彼は小一時間ほど話した頃、さも当然のことのようにフリーマーケットのことを、話題に乗せた。

何でも来週末に催されとのことだ。

私は初耳であったが、なかなかに興味深い話だと思い、もう少し突っ込んで聞いてみることにした。

なんでも、それを言い出したのは彼の父だそうだ。

流石に地域の顔役である。

やることなすことが周りを巻き込んでいく。

そして彼、貧乏神も主催者の1人として参加するのだという。

フリーマーケットの目的は地域振興。

目的が目的だからかどうかはわからないが、役所に届けたらすぐにOKがでたということである。

告知のチラシは回覧板や電柱のチラシ、コンビニなどにも貼ってあるという。

しかし、私はこの話を聞くまで、そのことを全く知らなかった。私の行動範囲はさほど広くないので、まあ無い話ではなからう。例えば、回覧板などが回ってきてても即座に次にまわってしまう。

貧乏神は私に、「客としてでよいので、友人などを誘って、参加して欲しい」と希望を述べた。

この男も主催者の1人であるから、参加者が少しでも増えて欲しいのである。

私も腐れ縁の1人として、微々たるものではあるが力添えをしたいとも思う。

しかも今回は、例の有益な情報、という前置きは出てきていない。ぶっちゃけ行っても得はないかもしれない。

しかし少なくとも損なことは無さそうだ。

何より私自身、来週末も特に予定は無く暇を持て余しているのである。

私は塚田に、「では何人が連れ立って行こう」と伝えた。すると塚田はおもむろに、満足そうに立ち上がり帰宅する旨を伝えた。

玄関まで送った私を塚田の「有益な情報だっただろ？」という言葉が襲った。

その言葉は私を戦慄させるに十分な破壊力を持っていた。

例のフレーズである。

有益な情報である。

しかし少し考えてみよう。

なんといっても、今回パターンが少し違うのだ。

前置きがある時は碌なことが無いが、今回はなんと後ろ置きである。長い付き合いで初めてのケースであるが、どう思案したものか。なお、後ろ置きという言葉があるかどうかは不問としていただきたい。

思案にくれ、曖昧な表情を浮かべる私を尻目に、塚田は誇り高そうに帰宅していった。

さて読者諸兄、私はどうするべきであろうか。

貧乏神・ぬらりひょん その2

光陰矢のごとしとはいったもので、気がつけば土曜日となっていた。そう、フリーマーケットの当日である。

私はこの一週間、貧乏神との約束を果たすため方々の友人知人腐れ縁に連絡をした。

しかし、「じゃあ行く」という友人が誰一人として存在しなかったのはなぜであろうか。

貧乏神への生贄と悟られたのか。

とりあえず、友人達は私ほど土曜日が暇ではない、充実している、そんな可能性には触れないのが優しさというものである。

そして私は優しい人が好きである。

愛をください。

さて、時計を見ると現在午前10時少し過ぎ。

フリーマーケットは、今まさに始まった所である。

自宅から会場までは徒歩で20分程度なので、そろそろ出ようかと考えた。

窓より空を見ればなんとよい天気。

柔らかな陽光がなんとも気持ちよさそうである。

会場までの道筋を散歩がてら歩くのも悪くない、と私は思い至った。

会場は運動公園と呼ばれているグラウンドである。

野球とサッカーが一度に行える広さであり、無闇に広い、という印象を私はもっている。

はてさて、ちゃんと格好がつくくらいには出展で埋まっているのだろうか。

私は運営本部と書かれたテントだけが存在する様を想像し、なんとも暗澹たる気持ちになった。

しかし考えていても一向に話は進まないため、私はともかく出発することにした。

さて古今東西、文人たちは散歩を好んだと聞く。

物の本でも「歩く」という行為は、脳に刺激がいき、頭の回転がよくなると読んだことがある。

考え事をする時には、辺りをウロウロ歩き回ってしまうという御仁も多くはないだろうか。

現実には会場までの道すがら、ホテホテと歩いている私は頭が回転しているのを感じ心地よくなった。

それはまるで麒麟児と謳われた頃に戻ったようであり、今であればかのアインシュタインの特殊相対性理論も完全完璧に理解できそうな気がする。

無論そんな気がするだけであるし、そもそも私は特殊相対性理論がどういうものをよく知りもしない。

20分ほど歩き会場に到着した私を待っていたものは、閑古鳥鳴き叫ぶグラウンド、ではなく100を優に越える出店、そして来場者でひしめく会場であった。

色とりどりのビニールシートが地面に絵を描き、並べられた様々な商品が混沌とした模様を浮かび上がらせていた。

その雑然とした美しさは、空から見るとさながら曼荼羅のように見

えるかもしれない。

食器、服、カバン、家電、カー用品、そしてなぜか等身大仏像まで並べられていた。

ソーセージの焼ける芳しい匂いも漂っている。どうやら売店もあるらしい。

大食いの友人、間宮なんぞがこの場にいたらさも嬉しそうな顔をしようである。

間宮についてはまたいずれ書くこととする。

ともかくフリーマーケットはもはや、ちょっとした祭りの様相を呈しているようである。

改めて回りの人々を見回す。

走り回る子供。

それを眺める老人。

商品を物色している女性。

ビールを飲んでいる男性。

微妙な距離を保つ中学生と思しき男女。

手をつないで歩く老カップル。

などなど多種多様な人々がそこにはいた。

彼らの話し声、笑い声、足音が、ざわざわという喧騒を奏でていた。その喧騒は、私に子供時分のお祭りを思い出させた。

綿菓子などほおばりながら、さらにたこ焼きが食べたいと駄々をこね、色とりどりの水風船に目を奪われ、お面を被りヒーローになりきり、好きな女の子を見つけてしまい物陰に逃げ込む、そんなあの頃のお祭りである。

ふと思い立ち、私は売店でビールを購入し一口飲んだ。

綿菓子をほおばっていた子供も今は立派な大人であり、綿菓子ではなくビールを選んだ。

我ながら年を取ったねえ、と空を見上げた。
そこには晴れ渡った空が広がっていた。

あてどなくフラフラと野良犬のようにほつき歩いていると、屋根に大きく「運営本部」と書かれたテントを見つけた。

誘ってくれた貧乏神こと塚田には、ちゃんと挨拶をしておこうと思
い至り、私は「友人たちはバラバラなり、思い思いに遊んでいる」
と、頭の中で何度も何度も繰り返しながらテントに向かった。

何事にも事前準備は大切なのである。

運営本部のテントに貧乏神はいなかった。

しかし代わりにぬらりひょんがいた。

初見の方を一目で妖怪、ぬらりひょんと判断する失礼は重々承知である。

しかし秒ごとにぬらりひょんであると確信せざるをえないのである。

外見がなんといってもぬらりひょんなのである。

禿げ上がり妙な形をした頭と、頭とは不釣り合いな小さい体を、質のよさそうな着物で包んでいる老人、がその全てである。

そのあまりのぬらりひょん具合は、某アニメより飛び出した、というのもつとも伝えやすく分かりやすい。

あの、ぬらりひょんがそのまま目の前にいるのである。

ぬらりひょんは、「塚田」と書かれた名札が置かれた机に座しており、机上の紙に目を通していた。

なるほど、この人がフリーマーケットの発起人であり、塚田の父なのだろう。

私は塚田の父に会ったことが無かったので、失礼ながら息子に似ている箇所を探した。

結果、貧乏神と似ている所は見つからなかったが、ぬらりひょんに似ている所はたくさん見つかった。

そう思ったのを知ってかしらずか、ぬらりひょんは私に気がつき、顔を上げた。

にこりと微笑み、「楽しんでいますか」とぬらりひょんは私に問いかけた。

それにしても、声まであのアニメのぬらりひょんに似ているとは思わなかった。

私の中での、ぬらりひょん指数は120%を超え針が振り切れた。危うく口がニヤリとしそうになったが、何しろ友人の父である。

失礼があつては塚田の面目が立たなくなる。

私は威儀を正し、咳払い一つ「楽しんでいます。」と伝えた。

ぬらりひょんは妖怪の頭目、総大将なのだと言ったことがある。
表をみれば黒山の人だかり。

フリーマーケットは大成功といえるであろう。

これだけの人間を集め、イベントを成功させるのであるから、名に恥じぬ、いや見てくれに恥じぬ実力の持ち主であることが容易に想像できた。

さりとて塚田のいない運営本部で、私がやることといえば、これ以上は全く思いつかない。

私は塚田の父に挨拶をし、早々にその場を離れることにした。

テントから出ようとした時、会場の隅から何かが現れ、周りが急に騒がしくなった。

どうやら何かのイベントが始まったらしい。

太鼓やラッパ、シンバルと思われる音が聞こえ、喧騒に音を加えた。

見えるところまで進んでみると、龍が踊っていた。

正確には、龍のハリボテを動かしている4人の男たちがいた。

4人は龍に獅子舞のごとく腹に腕を突っ込み、激しく上下に動かして会場をあちこち練り歩いていた。

あとは爆竹があれば、さながら中国のお祝いのお祭りである。

龍は会場中を練り歩き、ある時は人々を脅かし、またある時は子供に怒られ一目散に退散し、周りに恐怖と愛嬌を振りまいていた。

これはなかなか立派なアトラクションといえた。

龍はさらに動きを激しくし、舞い踊っていた。
周りの人は歓声を上げていた。

そんな時、龍に立ちはだかるものが登場した。
まさかの、あの等身大の仏像であった。
眼前に繰り広げられる仏vs龍の対峙、コメントに困る場面ここに
極まれり、である。

そして仏像を後ろから抱えて動かしているのは、やけに長細く、キ
ュウリに酷似した男であった。
仏像はなかなか重いのか、えっちらおっちらという感じで動いて
いる。

仏vs龍の対決。

これは見ものである。

暴れる龍とこれまたかなり重そうに暴れる仏。

予定されていたものなのか突発的なものなのかはわからない。

しかし迫力はなかなかあり、周囲の子供は歓声を上げ、またそれ
が仏と龍の動きをさらに激しくさせていく。

なお仏は暴れないだろうという突っ込みはご勘弁願いたい。

どれほど仏と龍が暴れたであろうか。

そろそろこのアトラクションにも飽きてきたときのことである。

仏像を動かしている細長い男がいい加減疲れてきたのか、仏像を立てて地に置いた。

すると、仏像はそのまま細長い男に倒れこんだ。

そしてそれにそのまま巻き込まれるように押し倒される細長い男。眼前に広がるはそんな光景であった。

「龍が勝ったぞー！」と歓声を上げる子供。

その言葉に舞踊る龍。

それと対比して、蛙のように押しつぶされた細長い男が哀愁をかもし出していた。

なんとも尻切れトンボな終わり方であるが、まあ子供たちが喜んでいるのでよしとしよう。

勝負あり、である。

今回のことで分かったことがある。

貧乏神が「有益な情報」と後ろ置きをすると、貧乏神自身にろくでもないことが起きる。

私はこの事実を深く心に刻み、そして「まあやつも生きてはいるだろう」と楽観し、さらにはさしもに飽きてきたので会場を後にすることにした。

ふと空を見上げた。

そこには晴れ渡った空が広がっていた。

赤鬼・青鬼・鎌鼬 その1

私は常に被り物をして生活をしている、と申し上げたら、皆様どのように思われるであろうか。

これは、私は常に下衆・高潔に限らず本心を隠し、社会や他人と軋轢を生まないように素の自分とは違う人を演じる、仮面を被っている、という意味である。

頭にカツラを被っている、ということでは断じてない。

もしカツラを被っている、と思われた方は今すぐ腹を切れ。

私の頭髪は砂漠のごとき不毛な大地でも、戦争最前線のごとき荒涼たる焼け野原でもなく、ただし森林伐採が進み、真ん中にため池が作られているだけである。

不毛の大地にならぬよう、海草をモリモリと食べ、刺激を与え、

閑話休題。

そして仮面を被っているのは私に限ったことではないと考える。

むしろ私を含めて人間というものは、すべからく様々な仮面を被って生活していると考ええる。

本音と建前は少し違う気もするが、大体あっている。

具体的な事例としては、友人の面白くも無い冗談には、大人の仮面をかぶって愛想笑いをしたり。

下衆な上司には、江戸時代の悪商人風な仮面を被り、もみ手で褒め称えたり。

嫌味な女にはイタリア人男性の仮面を被り、ご機嫌を取ったり。

まあこんなところであらう。

この話は読者諸兄、諸手を挙げて同意していただけたらと思っているし、また同意できなくともここは建前でかまわないので同意していただきたい。

ここでも仮面をかぶって欲しいのである。

ようするに、男女個人差あるだろうが、自分の心の倉庫にある様々な面を、その時々で使い分け、その場を一番うまく回すような仮面を被りながら生きている、それが私の持論である。

しかし手元が狂い、時に滑稽な、洒落にならない仮面を手に取り被ってしまう時もある。

そう、例えば酒が入った時などはその最たるものではないだろうか。

仮面の被り間違いは時に取り返しのつかないことになるという例がある。

これは友人の友人から聞いた話である。

ある男が意中の女性を食事に誘おうと思った。

彼は独身男性であり、無論下心がないといえは嘘であった。出来ればその女性と今よりもう一回りほど仲良くなり、そのままお付き合いなぞしたいわけである。

しかし彼は大変不名誉極まりない爵位、独身子爵を賜るほどの独身貴族である。

そんな独身貴族の仮面ではなかなか女性を誘うことは難しい。

独身貴族の仮面を被っていると、牛井屋で大盛りつゆだくを、ハムスターのほっぺのようになりつつかつ込んだり、カレー屋でから揚げとトンカツをトッピングしその雄大な光景に悦に浸ってしまったりする。

普段の生活がそれでは、女性の好むイタリアンレストランなんぞ頭の片隅にも浮かんでこない。

そもそも彼にはパスタとスパゲティの差もよく分らない。

しかし彼も独身と冠がつくとはいえ貴族である。

そこは彼女のためならばと、努力を惜しまぬ正しい貴族の仮面を被ったのである。

評判のよいレストランを探したり、優雅な物腰に気をつけたり、彼女の好きな映画を探したり、と、涙ぐましい努力をした。

彼は趣味であるゲームの時間を削ってがんばったのである。

そして努力が実ったか運がよかったか、その女性とデートの約束を取り付けたのである。

デートの当日、その夜某駅前。

時期は春先であり夜はまだ冷える頃であつたが、彼の心は高鳴り熱いくらいであつた。

目に映る全てが愛おしく見え、この世の全ては今このデートのためにあると錯覚し、そして全てのものに感謝をしなくなった。

さて彼女の家は待ち合わせの駅より3駅ほど北にあり、彼の家は5駅北である。

どうやら彼のほうが早く着いたようである。

そして予定の時間を目前にして、彼女がやってきた。

彼にとって初めて見る、彼女のプライベートであり私服である。

少し胸元の開いたシャツと緑のスカートを着用しており、とてもよく似合っていた。

そして若干芽生える下心。

しかし紳士の仮面を被っている彼は、下心が心をよぎったなどおくびにも出さず彼女をエスコートした。

道すがらにこやかに談笑し、デートの場所であるレストランに到着した。

出てくる料理に舌鼓を打つ二人。

おいしい食事は酒をすすませ、酒は人を饒舌にさせる。

その間も彼は、学者の面、芸人の面、詩人の面なぞ使い分け、彼女を飽きさせぬよう務めた。

2人はよく食べ、よく飲み、よく話し、よく笑った。

食事も終わり、あらかた話して夜の9時。
彼は彼女を家まで送り届けることにした。

早っ！！と思われるかもしれない。確かに夜はこれからである。
確かに彼はその後映画も予定していた。
しかしそれでは彼女の帰りが遅くなってしまう、と考えたのだ。
彼はあくまで紳士であり、女性への気遣いを忘れてはいなかった。
濡れ場や色っぽい話が無くて恐縮であるが、これは友人の友人の
話なのだから私の責任ではない。何卒ご勘弁願いたい。

さて、彼女の家までは北へ3駅ほどであり、彼の家は北へ5駅。
無論電車で帰宅をしても問題は無いのであるが、2人ともいささか
酔っ払っている。

万が一を考え、タクシーを使い帰宅することにした。

タクシーに乗り込み数秒後、彼女は酔いすぎたのか、コロンという
擬音と共に寝始めた。

さらにはスースーという寝息まで聞こえるではないか。
彼はかわいらしいなあと思いながら、彼女を見やる。

彼も男であり、というのが言い訳になるかは分らないが、どうし
ても胸元からみえる肌色に目がいつてしまっていた。
不埒な所を見るのは決して紳士ではない。それは彼もわかっていた。
しかし見ようと思わなくとも、そこが引力を発しているのか目が吸
い寄せられてしまうのである。

さらには酒も入っているの、その引力はことさら強力である。

彼は最後まで紳士の仮面を被るつもりであった。

彼女を無事に送り届けるのが、彼にかせられた最後の使命であり、無防備に眠りはじめた彼女は彼の守るべき人である。しかしはたして。

雌雄を決するべく、紳士の仮面 v s 酒と男性の本能が開始された。

その勝負は1ラウンド2秒、紳士の仮面がKO負けされ、即座に幕を閉じた。

彼の被っていた紳士の仮面は気持ちよく砕け、その下から見まごう事なきエロ河童の仮面が現れた。

そして、その視線に気づいたのか彼女は目を覚まし、しかしその3秒後に彼の左頬には綺麗な手形がつくことになった。ここまでで実に5秒ほどのことである。

そうである。

雌雄を決した勝負より、手形がつくまでの短時間で、私、もとい友人の友人の涙ぐましい努力は水泡に帰したのである。

その後どうなったかは詳しくは書かないが、彼女の中の彼の株価がバブル崩壊のごとく急下落したことはご理解いただけたことであるう。

長々と書いたが、酒が入ると普段見れない面が見れて面白くも恐ろ

しいことになる、という事である。

酒とはかくも恐ろしい。

赤鬼・青鬼・鎌鼬 その2

私は酒が好きであるが、かなり弱い部類に入る。ビールをコップ1杯程度であれば問題は無いが、日本酒や焼酎など少し強めの酒になるともうだめである。

皆様方のご友人にも、強い酒が飲めない人というのがいると思うが、おおよそそんな感じだと思っていただきたい。

まあ経済的といえば経済的である。

350?のビール1缶の代金、何百円あれば十分気持ちよくなり、浮世の憂さ晴らしが出来るのである。

我ながら安く出来ている。

私は酒は好きだし、友人との飲み会も好きである。

しかし会社の飲み会は全く好きではない。

会社の飲み会とは、お題目はコミュニケーションや親睦の場であるが、実際はお説教の場であり仕事の延長線上に座している。このあたりサラリーマン諸子であれば、納得していただけるであろう。

恐ろしいほどの気を使いながら、そして眠くなったのを我慢し、上司のお説教や人生訓を聞くというのは苦行以外の何者でもない。そして苦行の時間ほど長く感じる時間も無い。

以前、上司のお説教を聞きつつ、もう1時間は経過したと思っていたら、6分しか経過していなかったことがあった。

その驚愕の事実には私は、一寸悟りが開けそうになったが、ブツダの

言うとおりの苦行では悟りは開けず、開いたのは瞳孔ばかりである。

そして、なにより飲ませられる、ということがイヤである。

自分のペースで飲めないというのはこれまた苦痛である。

上司に「俺の酒が飲めんのか」と言われれば、カップンカップン、それこそザルのように飲み込まざるをえない。

ああなんと悲しいサラリーマンの性であろうか。

酒に弱い私はその後、いいパンチをもらったボクサーのように倒れこむのがお決まりである。

もうすぐ三十路というのに、おもちゃのような扱いを受けているのである。

私の体をおもちやにしないで、と女性が言えば卑猥であり、あらぬ妄想を掻き立てられるが、私が言えば冷ややかな視線で射抜かれること請け合いである。

男女平等を叫びたいところであるが、こんなところが平等になっても全くうれしくない。

会社の飲み会で溜まったストレスは、悪友たる貧乏神などと飲みに出かけることで発露することになっている。

言葉悪く言えば口直しであり、言葉よく言えば…と思ったがどういつていいか言葉が浮かばない。

まあ愚痴吐きゴミ捨て場である。

相手は貧乏神の時が多いが、狐や狸はたまた笹山、そしていずれ書く間宮のときもある。

誰と飲むにも、会社の人間と顔を合わせる可能性の低い、やけに奥まった店で飲むことにしている。

そして友人と大いに酒を飲み、語り、心の溜まった澱を吐き出し、そして厠に酒を吐き出すのである。

ここで最も重要なことは、会社の人間が絶対に来ない店、ということであり、これは自分が匿名でいられる場所という意味である。壁に耳あり障子に目ありな場所で呪詛は唱えられないのである。

ある土曜日、いつもどおり私は、貧乏神と飲むことにした。

先週の会社の飲み会でもひどい目に会ったはずである。

はず、と不確定なのは、その時の記憶がぶっ飛んでおり、翌朝道路の中央分離帯で爽やかな目覚めを迎えたことしか記憶に無いからである。

さて最近のお気に入り、やけに奥まった店「居酒屋きんぴらごぼう」である。

この店は看板に偽りがあって、メニューにきんぴらごぼうがない。

看板に偽りありなのだが、そのことが人の話題に上らない知名度を誇る。

要するに流行ってはいない。

まさしく私のような匿名性の闇に潜みたい者にとっては、これ幸いな居酒屋なのである。

いずれ書くといっていた間宮について唐突に記す。

間宮は貧乏神と同じく高校時代からの友人である。

高校卒業後は京都にある某有名私大に進学をした。

大学では建築土木を修め、現在は建築系の大企業に現場監督として

勤めている。

専門の建築土木はもとより、歴史、心理学、哲学、文学、はたまた民俗学にいたるまで幅広く、また深い造詣をもっている。

ちなみに初対面時に披露してもらった知識は、仏像についてであった。

そして身の丈は190cmを少し超え、その長身を生かしスポーツも得意であり、さらには顔は少し赤みを帯びている。

古来より美形を現す表現として紅顔というのがあるが、彼はまさしくそれである。

さてここまで読んで、皆様間宮をどのようにイメージされたであろうか。

有名私大卒、博識、長身、スポーツマン、紅顔。

ここまでは古代ギリシャ美術がイメージするような、完璧男子を表すキーワードがちりばめられている。

しかし人間とはそれだけで構成されているものではない。

このままでは木を見て森を見ずであるため、カメラを引いて全体像を書いてみることにする。

さて、身長は190cmを少し超えているが、目方も130kgを少し超えている。

マゲを結っていない力士をイメージしていただければ大方間違いない。

また髪は天然パーマであり、かつ全体的に体毛が濃く、その剛毛は使い古した亀の子だわしに比喻される。

さらに目はぎよるぎよると大きく、やたらめったら目力がある。
電車の中で目を逸らされることを得意とするほどである。

そして建築土木を生業としているせい、専ら作業着を着てあちこち出歩き、またもや生業の癖なのか、声も大きくよく通る。

紅顔もあいまって、形容するならばまさに赤鬼であり、おそらく金棒が日本一似合う男であろう。

惜しむらくは、金棒が似合うコンテストなぞ過去一度たりとも行われたことがないことである。

まあそんなコンテストは誰も得をしないのであるからやる意味もない。

間宮について詳細に述べてみたが、美形のイメージを損ない、気分を害された方も見えるかもしれない。
しかしこれが現実であり、現実には時に非情である。

さて、赤鬼の食事について述べよう。

彼はその巨軀に見合った大食漢、早食いであり、エンゲル係数120%、借金をしてでも飲んで食うという噂である。

鯨飲馬食、鯨のように飲み、馬のように食うという言葉があるが、彼のためにあるといっても過言ではない。

むしろ、鯨を飲み込み馬を食らうといっても、間宮であれば強ち嘘に聞こえない。

大体私達普通人の3日分を、1日で平らげると思っていたきたい。ご飯をジャーからしゃもじで食べていたという目撃情報もあり、そのほどが伺われる。

ちなみに目撃者は貧乏神であるが、どんなシチュエーションでそれ

を見かけたのか。

どのような理由にせよ、さぞや迫力満点な光景であつたであらう。以前テレビで巨漢タレントがカレーは飲み物、とのたまっていたが、間宮にしてみれば親子丼くらいまでならば飲み物の範疇ではないかと思う。

しかし酒にはめっぽう弱く、やはり強めの酒をおちよこ一杯飲んだ程度で赤ら顔の色が濃くなる。

いや、むしろ赤というよりも赤銅色になる。

酒の弱さは私とどこいどっこいである。

さて唐突に間宮の紹介が始まったのは、私たちが「居酒屋きんぴらごぼう」に入ったとき、間宮がいたからである。

河童と貧乏神、そして赤鬼で期せずしてささやかな酒宴が行われることとなった。

しかし気心の知れた友人というのは、一緒に飲んでいて気楽なものである。

3人が互い互い10年以上の付き合いであるから、どんなヤツで何が好きで何を言っではいけないのか、学生時代の失敗談も失恋話も全てを知っているし分かっている。

貧乏神がイベント企画の話を身振り手振りを交えてプレゼンテーションすれば、私は唇をアヒルのように尖らせ、あーでもないこーで

もないと茶々を入れていく。

赤鬼がいかつい顔をニコニコさせながら唐揚げを口に運んでいれば、貧乏神が負けじと赤鬼から奪い取るうとし、頭を小突かれる。

私が過去の失敗を思い出し、心の深遠に飲み込まれそうになると、赤鬼はそつと哲学の話題などを話し出し、私に議論を吹っかけ、そして内容が分からない私は自分の学のなさを呪い、更に深遠に近づいていく。

それら長年の歲月繰り返されたものであり様式美である。
それが一通り終わると、次は皆で様々なものに向けて呪詛を吐くのである。

むかつく仕事の同僚、部下、上司へ

不甲斐ない政治へ

振られた女性へ

大盛りを頼んだのに全然量の足りない飲食店へ

バグだらけのゲームを発売したゲーム会社へ

等身大仏像に対して

不甲斐ない抜け毛と毛根へ

と、それはもう止め処なく。

しかし私たちは呪詛をはいた後は、最後に必ず笑いを入れることにしている。

呪詛をただくだけでは鬱屈した気持ちになるだけだからであり、仕事でガチガチに固められた心を解くためには、笑いが必要であるのだ。

笑い話にしようとして滑るときも多々あるが、まあ滑ってもいいじ

やない、酒の席だもの。

2時間ほど2人で語ったところで私たちは満足をした。

酒は百薬の長というが、それは友人との語らいがあつて、初めて言えるものだと思ふ。

それほどまでに私たちは飲み、笑い、呪つた。

ところで我々は1つミスを犯した。

間宮がいつも以上に酒を飲んでいることに気づかなかつたのである。

赤鬼・青鬼・鎌鼬 その3

「きんぴらごぼう」を出たときより、赤鬼の様子がおかしかった。うなだれ、首の据わっていない赤子のように、頭が前後左右に揺れている。

いや、赤子の首を振り回してはいけませんが、明らかに酔いすぎた風情である。

赤鬼の家まではここから徒歩で20分程度だそうだが、この様子では些か危うい。

おそらく家に着くまでに倒れるか、頭をそこかしこにぶつけ、角が出来上がるかのどちらかであると思われた。

万が一を考え、私と貧乏神はタクシーを呼ぶこととした。

タクシーが到着するまでの間、赤鬼の首は動きっぱなしであり、ちよつとしたホラー映画の1シーンと言えた。

程なくタクシーが到着し、赤鬼を乗りこませる。

間宮を無事に自宅まで送り届けるべく、私と貧乏神は同乗することにした。

運転席には運転手さん、助手席に私、そして後部座席に赤鬼と貧乏神という布陣である。

本来は後部座席に3人じゃないのか？と思われた方もいらっしやるだろうが、そこは間宮のサイズを考慮していただきたい。

不意に後ろを振り返れば、首を振っている赤鬼がまず目に入った。いやすでに顔色が変色し、赤鬼は青鬼となっていた。

その横にはだらしなく涎をたらしている貧乏神である。

こいつも酔っ払っているのか。

5分ほどで我々は間宮の家に到着した。

間宮は実家暮らしを良しとせず、男たるもの親の脛をかじってはならない、という硬派な持論により絶賛一人暮らし中である。

しかし彼が住んでいるアパートは、彼の外見と正反対なおしゃれな洋風白壁、そんな小奇麗な建物であった。

例えるなら、女性誌に「出来る女の部屋、スィーツルーム特集」な感じで出てくる建物である。

読者諸兄申し訳ない。

うまく説明できないし、そんな特集があるとも思えない。

要するに、彼にはいまいち似合わない感じなのである。

青鬼は、おぼつかない手つきでポケットより鍵を取り出し、ドアを開けた。

すぐさま私と貧乏神は、青鬼を部屋の中に投げ入れた。

放り投げられた青鬼は、廊下にすつくとその両足で着地した。

無論室内に電気がついていないので、暗がりの中に青鬼の巨大なシルエットが浮かぶ格好となった。

程なくフラフラと室内に入って行き、慣れた様子で明かりをつけ座り込んだ。

ポフウという音が聞こえたことから、ソファに沈み込んだものと思われる。

私と貧乏神は中に入ることとした。

彼の部屋は１LDKというのであろうか、大きなリビングに１部屋が併設されている。

リビングには大きなテレビがあり、その前にはソファ。

家具も含め全体的にベージュで構成され、こざっぱりとした印象を与える。

掃除や整理整頓も行き届いているらしく大変住みやすそうである。

男の一人暮らしといえば、新種のキノコが生えそうな雑然さを特徴とするが、キノコどころか埃すら探すのは困難であらう。

しかしキッチン部分には業務用と思われる巨大な冷蔵庫そして大量の米袋があり、私は、ああ間宮だなあと妙な安心感を覚えた。

一仕事終えた充足感と酔っ払った気持ち悪さが私の中で持ち上がった。

とにかく冷たいものでも飲んで一息つきたい。

貧乏神はどうだろうとそちらを見てみると、涎で顔半分を光らせながら、あらぬ方向を見つめていた。

このままでは涅槃に旅立ちそうであるので、早々に気付け薬が必要と感じた。

私はとりあえず冷蔵庫を開けた。

冷蔵庫の大きさから豚一頭が逆さづりに入っているかと予想したが、中身は普通の食料群であった。

しかし量は桁外れであり、一人暮らしとは思えないほどの食料が詰まっていた。

そのつまり具合を言葉であらわすならば、「みっちり」もしくは「ボンレスハム」である。

水分も豊富にあり、ポカリスエット、ミネラルウォーター、スプライト、コーラなど選り取り見取りである。すべてが2リットルというのが間宮らしく、またもや妙な安心感を覚えた。

私はポカリスエットを取り出し、蓋を開け、そのまま口をつけ中身を胃にぶちまけた。

ごぶごぶと音を立ててポカ리를飲む。

息が続かなくなり、「ぶえあ」という珍妙な言葉と共に息を吐き出す。

私は一息つくことが出来、生き返った。

なお別に死んでいたわけではない。

貧乏神を見れば、先ほどと同じように涎で顔半分を光らせていたが、なぜか正座で微動だにしていない。

そして瞳はやはり虚空を見据えており、すでに涅槃への片道切符を購入したようである。

なぜ正座なのかと疑問は浮かぶが、とりあえず私は貧乏神の目の先にポカ리를差し出した。

今まで虚空を見つめていた貧乏神の目がポカ리를捉えた瞬間、その瞳は野性味あふれる輝きをたたえた。

そして野生動物のような素早さでポカ리를強奪すると、ごびゅばぎゅと喉を鳴らして飲みだした。

正確には、飲んでいるのかこぼしているのか分からない有様で、顔半分を先ほど以上にぬらぬらと光らせた。

彼は「ぶろあ」という奇天烈な言葉と共に息を吐き出し、服の袖で顔をぬぐった。

一息ついた我々はリビングの絨毯の上に座り込んだ。

私たちは「たまには飲みすぎることもあるよな」と言葉を搾り出し、
ばつの悪そうな顔で見合わせた。

そういえば昔にもこんなことがあったよな、昔からやっていること
は変わっていないよな。

仲のよい奴らでつるみ、遊び、笑い、呪う。

不意に間宮が「ぶるおおん・・・」というエンジン音のような声
を発し起き上がった。

そして周りを見渡し大きく息を吸い込み吐き出すと、私たちと同じ
ようにばつの悪そうな顔をした。

そして冷蔵庫に行き、ミネラルウォーターを取り出すと、一気に喉
に流し込んだ。

2リットルほどの水が、ものの数秒で間宮の胃袋に飲み込まれた。
この地球上にもブラックホールはあるようである。

水を飲み干した青鬼は赤鬼にもどっていた。これで一安心である。
そして、赤鬼は私達を振り返り、やけに無邪気な顔でこう言った。

「なんで俺たち女にもてないんだ？」

鎌鼬という妖怪は、岐阜県飛騨地方の妖怪で、3匹が連なってやっ
てくるとい言い伝えだそうだ。

1匹目が対象の体勢を崩し、2匹目が斬り、3匹目が薬を塗る。

3匹目が薬を塗るために、血も出ず痛みも無いとのことだ。

「なんで俺たち女にもてないんだ？」

「なんで俺たち女にもてないんだろうな…」

「なんで俺たち女にもてねえんだああああ！！」

しかし間宮の言葉から発生した鎌鼬は、3匹ともが勢いよく斬りつけてくるという恐るべき妖怪であった。

薬も塗られないのでそれはもう痛く、血は滲まないが涙が滲んだ。

不意をつかれなす術もなく3回膾に斬られる私と貧乏神。

その3回の攻撃で私達は、十分に戦意を喪失し、顔をうなだれた。さらにその言葉は、おそらく間宮自身にも斬激となって襲い掛かっていたのであろう。

言葉を発するたびに手で宙を払うマネをしており、そして3つ目の言葉を発した後、床に突っ伏した。

後にいびきが聞えてきたところから察するに、そのまま寝てしまったようである。

私はうなだれながら貧乏神の様子を伺った。

貧乏神の顔から水分が落ちるのを確認したが、それが涙なのか涎なのかポカリなのかまではわからなかった。

間宮が言葉を発した時間は、ものの数秒であろう。

しかしその数秒で、酒を酌み交わし、交友を暖めたこの数時間は一

瞬でふいになった。

何十年もかけて丹念に作りこみ築いた建造物が戦争で爆破され、瞬時に灰燼に帰した、そんな有様である。

武力紛争は何も残さない。

ただただ心が痛ましいばかりである。

私はうなだれながら、痛む心を治め頭を回転させた。

普段の間宮はいきなりそのようなことを言う男ではない、と。

ここに断言するが、私達はたしかに驚くほどもてない。

そしてそれは客観的な事実であり主観的にも事実であるが、我々はそれでも面白おかしく生きてきた。

独身貴族の仮面を被り、自嘲しながらでも仲良く楽しく生きてきた。

しかし今はそれら、独身貴族の仮面が剥がれ、崩れて落ちてしまっている。

「女性にモテない」という事実は手ひどい攻撃となって降りかかってきた。

例えるならば、アクション映画で主人公をぺしゃんこにしようと両側の壁が押し迫るシーンがあったでしょう。

我々には常にその壁が押し迫ってきている。

常日頃は、独身貴族という仮面をつつかえ棒代わりに壁を防いでいたが、酒によりそれが割れ、壁にぺしゃんこにされてしまった状態であるといえる。

間宮は壁に挟まれ、一種のヒステリー、パニックを起こし自爆。そして我々に誘爆。

結果、恐るべき大惨事を引き起こしたのである。

やはり酒とは恐ろしい。

貧乏神の顔からまた水分が落ちた。

その後、ズルツと鼻をすする音がしたことから、鼻水であることが確定的に言えた。

やおら貧乏神は、深呼吸を1つすると、すつくと立ち上がり、胸をはり、肩をいからせた。

目には決意を秘めた光がたたえられており、その姿はさながら戦場に赴く将校のようであった。

彼はその凜々しい姿のまま一言も語らず、部屋を出て行った。

後に残された私はどうしていいかわからず、もう1部屋より毛布を持ってきて、それに包まり眠むろうと思った。

なおこの大惨事を招いた張本人に意趣返しがしたくなり、間宮の鼻の下に油性マジックでヒゲを書いたことをここに明記させていただく。

七人みさき その1

間宮部屋での惨劇より1週間ほど経過した。

それにしてもこの1週間ほど、塚田と連絡が一切取れなかったのはなぜであろうか。

電話をしても出ず、メールを飛ばしても返ってこない。さりとしてわざわざ自宅に押しかけるほどの気力は無い。

これは一寸何かあったかもしれない。

まさか惨劇のキズが癒えずに身投げでもしたのではないだろうか。

塚田はああ見えてもガラスのような精神を持っている。

そして碎けた心は、ガラスと同じようにそっくりそのまま再現することは不可能であることを彼奴は知っている。

常日頃の厚顔無恥な行いは、そのガラスの精神を守るための仮面なのである。

一度溶かし、再度形を整えてやらねばなら

申し訳ないがここで筆が止まった。

私はやはり嘘を書くことは出来ない性分なのである。

やつに限って言えば、身投げやらその様なことは断じて無い。

ガラスはガラスでも車のフロントガラスに用いられる合わせガラスのごとき強度を誇る。

叩いても殴っても碎けないガラスのハートだ。

ある作家は玉川上水に入水自殺したある作家を、その様なことは絶対にしないヤツとのたまったが、同じ心境であろう。

いや、その場合、結局はその作家は入水自殺してしまったのだから危ういではないか。

ココは聞かなかったことにしていただきたい。

まあ多分、携帯電話をなくしただけであると思われる。

いやそうに違いない。

更に本日は土曜日であり、塚田のことばかりにかまけている暇はない。

私にはゲームという趣味があり、ゲームによって土曜日を満喫するのである。

連絡の付かない塚田に思いを馳せていても埒が明かないし、なににより一向に面白くない。

空腹を感じ、ふと時計を見ると午後12時過ぎ。

そろそろ昼なのだから、腹が減って当然である。

さて飯を腹に入れるのが先か、ゲームが先か。

これは世紀の難問である。

ポアンカレ予想も真つ青であろう。

しかし私は強靱な精神力でゲームを選択した。

何事にも優先順位は存在し、私の場合はゲームのほうが優先順位が高いのである。

これが黒髪の乙女とのデートであればデートを優先するのであるが、当然ながらそのような用事は影も形も無い。

つまりはゲームである。

とにかくゲームなのである。

今やっているゲームは世代交代を繰り返しながら、憎つくき敵を打ち倒すRPGである。

古いゲームではあるが、これがおもしろい。

親が果たせなかった宿願をいずれ子が果たせるように、技術や宝物を継承していくのが主要な行動である。

その継承していくという過程が面白い。

キャラクターには寿命が設定されているので、いかに気に入ったキャラクターが存在しても、いずれはいなくなってしまう。

子孫を残すことの大事さを痛感させられる。

一寸「私は子孫残せるのか？」と思ったが、なに、今はゲームをすることが先決である、気にすることは無い。

考えを変えよう。

いや、むしろゲームの中ですら世代交代が行わ

ピンポン

ゲームを始め、自らに苦行を課す直前に家のチャイムが鳴った。

思考を中断するのに渡りに船、いや客人が来たのであれば、それを優先するしか仕方が無いではないか。

いやあ、まいったまいった。

私は嫌な汗をかきながらドタドタと玄関までかけていきドアを開ける。

ていのよい言い訳なのはちゃんと理解しているので、一切触れない

で頂くのが人情ではないだろうか。

バーン！と、いう擬音と共に颯爽とドアを開けた私の目前に、巨大なビニール袋3つが姿を現した。

なお、擬音は大嘘である。むしろ掛け声。

中からは芳しき芳香が漂っており、おそらく牛井であることが想起された。

ビニール袋を持っている手は巨大で毛深く、間宮の手のようにであり、手をたどって顔を見てみるとやはり間宮であった。

そしてその後ろには久しく見なかった顔が並んでいた。

林

中村

片岡

加藤

彼らは高校時代の友人である。

数年は顔を合わせていないなんと懐かしい面々であり、林に至っては10年ぶりの再会である。

塚田と間宮、そして私を加えれば、あの悪名高き独身貴族円卓会議のメンバーそろい踏みと言えた。

え？あのメンバー勢ぞろい？

思考の渦に飲み込まれ巻き込まれる私を尻目に、その集団は挨拶もそこそこにドカドカと我が家に乱入した。
家主である私が了解を出していないのに、である。
そして私がゲームをしている居間へ入って行き、ガサガサとビニール袋を広げるような音を立てた。

奥から間宮の声で「あーそうそう。あとは塚田がきたら10年ぶりの円卓会議始めるから！」と聞こえたので、思考を巡らせる。

とりあえず塚田は生きているようで安心した。

なんだやはり生きているのではないか、心配して損をした。

貴様は本当に心配していたか？と問われれば、少し弁明させていた
だく時間を頂きたい。

と、同時に様々な疑問がわきあがった。

しかしなぜ家主の私に断りもなく私の家で円卓会議を行うのか。

以前の化け猫もそうであるが、家主の尊厳なんぞ砂上の楼閣なのであろうか。

なんで私ばかりがそうなのか。

これは世間の常識なんであらうか。

そもそも主催したのは誰か。おそらく塚田だ。秘密にしたいがため、電話に出なかったに違いない。

いつそんなことが決まったのか。

それにしても、私のあずかり知らぬところで、私を巻き込むな。
一応一言断りを入れる。

考えを巡らせる私の鼻を牛井の匂いが撫で、私の思考は牛井一色、肉一色となった。

なによりも今は、目の前の牛井である。

独身貴族円卓会議について記す。

まずは独身貴族からである。

世間一般での独身貴族とは「独身で気ままに暮らしている人」を指すと思われる。

最近あまり耳にしない所を見ると、おそらく死語なのであろう。しかし我々仲間内ではいうところの独身貴族とは「独身で気ままに暮らしている人」ではなく、「彼女が欲しいのに出来ない人」のことを指す。

例えば、私、塚田、眼前の間宮、林、中村、片岡、加藤、そんなもてない男達がここで言う独身貴族である。

この呼び名は我々が高校生の時に思いつき、おおよそ15年を誇る無駄に歴史のある呼称なのである。

当初はモテナイ男たちである我々が、自分自身に発破をかけるために自嘲気味に名づけたものだ。

1秒でも早くこの不名誉な称号を外そうと自らに発破をかけるのが目的であったが、1年もすると当初の目的は忘れ去られ、私たちの

思想的遊び場へと変貌していった。

しかし15年も昔の高校生時分からモテナイと自負しているのだからたいしたものである。

私達に惜しみない拍手を！！

貴族というからには公爵伯爵など様々な名称の爵位が存在する。

公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵。

明治時代の日本のような階位である。

しかしながらこの独身貴族においては、爵位の名称は意味を成さない。

もともと意味の無い、ただの毒の沼地なのだから当然である。
ちなみに「なんとなくかつこいいから」という理由で伯爵が大人気である。

なお私はただでさえも、もてないというマイノリティに属するのにそこでもマイノリティを気取り、子爵を拝命した。

阿呆かどうかは各自判断されたし。

私は自覚している。

なお、得恋によってこの独身貴族の称号は剥奪されると定められている。

称号剥奪とは大変不名誉な事態であるが、社会的には剥奪されたほうが名誉であることは言うまでも無い。

御伽噺のように亡霊共潜む毒の沼に引きずり込まれた時は、恋人によって窮地を救われるのである。

独身貴族についてはご理解いただけたと思うので、次は、独身貴族円卓会議についてである。

端的に言えば、独身貴族の拝命を受けた私達たちだけを集めた会合が行われる。

それが独身貴族円卓会議である。

ありていにいえば身内の集まりといえる。

誰かがやりたいといえばそれで会議は成立であり、あとは集まるだけである。

集まる場所は同じように誰かが勝手に決める。

そう、それは今回のように独断的に。

なお円卓会議というが、円卓で行ったことはない。

円卓と名前が付いているのは、そのほうがかつこいいから、である。ふと思ったのであるが、今の世の中、円卓なんぞあるのでしょうか？ 国連本部以外で見たことなんぞ無いので、どなたか情報をお持ちであればお知らせ願いたい。

話しが脱線したので元に戻す。

さて、単なるモテない奴らの会合と侮つてはいけない。

そこでは腐りきった世の中に対して正義の鉄槌を与えるべく、極めて崇高な話し合いが行われているからである。

ちなみに腐りきった世の中とは恋愛至上主義な現実に対してであり、政治的理念は一切無い。

世にあふれる恋愛至上主義に対して明確に反旗を翻し、独身貴族のあるべき姿を話し合うのである。

会議では議事録もちゃんとつくり、印刷して各自に渡される。そして各自そつと机の引き出しかゴミ箱にしまうのである。

一切行動に移さず、口外せず、本当にひっそり行われるのがミソである。

誰にも迷惑をかけぬ、恐ろしく健全な、行動としては不健全かつ非建設的、そしてやたらと内弁慶な会議なのである。

最後に行われたのが今から10年前、その時に円卓会議の無期限停止が全会一致が可決された。

というのも、二十歳を目前に彼女がいらないという理由で集まるのが、あまりにも痛々しくなってきたからである。

自傷行為にも痛みは付きまとうのだ。

さて現実に戻って考えてみれば、やはり謎ばかりである。

なぜ今、またもやこんな痛々しい会議を復活させるのであろうか。鎌鼬の1件で気でも触れたか、それともやけくそにでもなったのであろうか。

そして、なぜ牛井には紅しょうがこれほどまでに、合うのであろうか。

七人みさき その2

さて現在、眼前に広がる光景をご説明すると、男7人が1つの部屋で車座になりながら牛丼をかつこんでいる。

そして部屋に広まる牛丼の芳香と咀嚼音。

もし仮にこの世に男指数というものがあつたとしたら、今現在その男指数は120%を超えているであろう。

その指数が何を表すのかは全くの謎であるし考える気にもならないが、120%には違いない。

細かいことは問わないでいただきたい。

それにつけても何であろうか、この男だらけの部屋は。

色であらわすなら、灰色か茶色一色の世界である。

なんとも花が無い。

右を向いたら男、左を向いても男、上を向いたら天井、下を向いたら食べかけの牛丼。
なんという有様だ。

悲観して考えれば、ここは地獄ではないだろうか、と疑問を持たずにはいられない。

男地獄、そう、ここは男地獄である。

我々は男地獄に墮とされた、恋愛亡者ではなかるうか、と考えてみる。

恋愛は太陽のようにまばゆく、温かさを放っている。

しかし恋愛亡者が恋愛を直に見れば、すぐさま焼き払われてしまうだろう。

だから我々亡者は、斜にかまえ、直撃をしないようにしているので
はなかるうか。

そう考えると、全てがうまく説明できてしまい、納得してしまい
うである。

そして現実には涙で牛丼が塩辛くなるのであろう。

そうこう考えている間に、間宮が3杯目の牛丼を平らげた。

口からはブハウという音と、熱気が吹き出した。

しかし以前から知っていたが、この男どこまで食うのであろうか。
胃袋はどうなっているんだ？

それ以外の面々は赤鬼の食欲に気おされたのか、それぞれ1杯の牛
丼をボソボソと口に運んでいる。

その光景は、私に更に強く地獄を想起させた。

我々は男地獄に堕とされたわけだが、一体全体どんな罪を犯したの
であらうか？

我々はただモテナイだけである。

モテナイことは罪なのであろうか？

否、断じて罪ではない。

誰にも迷惑をかけずに生きてきたはずだ。

罪なぞ犯しているはずがない。

これは閻魔大王に直に文句を言っ
てやらねばなるまい。

無罪だ、冤罪だ、プラカードの準備をしなくては。

モテナイ理由だってそう大した理由ではないと思われる。

間宮はただの大食漢でやたらと食うので肥満が止まらない。デブなのが理由であろう。

林はちよつと癪癪持ちではありちよつとしたことですぐ怒る。しかし感情は人間の性だ。仕方ないではないか。

片岡は無職で一切合財働く気が無いが、根は悪いやつではないし頭もよい。残念ながら金はいつも無い。

加藤はただのAVマニアであり、好きなアイドルにAV女優を公言している程度だ。それ以外はむしろモテそうな顔立ちをしている。

中村は物欲が人並み外れて強いだけだ。主にフィギュアに対する物欲が。

我々の碌でもなさはお理解いただけたかと思うが、世の恋愛至上主義を呪うのもご理解いただけたかと思う。

ドン

その時に私の脳に稲妻が落ちた。

私たちは罪を犯しているのかもしれない、それに気が付いたのである。

皆様7つの大罪はご存知であろうか。

人間を罪に導く可能性があるとされてきた欲望・感情のことである。確か、傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、色欲であったはずだ。うん。某錬金術師のマンガでそう書いてあった気がする。

さて、今現在のメンバーを、仮にであるが、その7つの大罪に当てはめてみよう。
するとこういう関係図が出来上がる。

間宮	：	暴食
林	：	憤怒
片岡	：	怠惰
加藤	：	色欲
中村	：	強欲

そして私は元天狗である。私：傲慢
あまりにうまく符合してしまい寒気すら覚える。

もしやこれが私たちの犯した罪なのであろうか。
しかし7つの大罪は男地獄に落とされるほどの罪なのであろうか。

そんな時、部屋の中にやけに色の悪いキュウリが入ってきた。
いや、キュウリに酷似したやけに顔色の悪い人間が入ってきた。
言うまでもなく貧乏神こと塚田であった。

いずれにしても待ちわびた男の登場であったが、塚田はなぜかスーッ姿であった。

そんなにめかしこんでどうするつもりだ、ここには男しくないのに。

そして家に入ってくるときにはチャイムくらい鳴らせ。

しかしそんな私を気にかけることもなく、塚田は胸をはり、目に光をたたえ、地獄に落とされた亡者を一通り見渡した後、それはそれは大仰に語りだした。

「只今より独身貴族円卓会議を行う。まずは前口上を聞いていただきたいので、皆々様、取り急ぎ牛井をおいていただきたい。そこ、箸をおけ。ちょ、まーみーやつ！！ちやい！！」

（ゴホン）

「まず今回皆さんに集まっていたいたのは他でもない、来る2月14日の悪しきバレンタインデーに向けて、我々独身貴族のあるべき姿を再度確認しようと思ったのである。そして出来れば、身近な人たちに行うほんに些細な嫌がらせのアイデアも募集しようと思ったのだ。なおこれは、決して嫉妬から来る悪意ではない。世の恋愛至上主義者たちに、いかに恋愛というものが稀有で有り難い、そう有り難いものであるかを再認識していただく、自己犠牲の心を持った、崇高なる活動なのである！」

塚田：
嫉妬

やはり我々は大罪を抱いていたのである。
それでは男地獄に落とされても仕方が無い。
もう観念して男地獄に身をやつそう。
それにしても蜘蛛の糸はまだだろうか？

そして独身貴族円卓会議が粛々と開始された。

しかし何か外に向かってアクションを起こすのは初めてではないかと思う。

しかも嫌がらせ。

何の冗談であろうか、小学生か。

以下に今回会議の内容、会話を収めた議事録を掲載させていただく。これは発言者とその発言内容を取りまとめたものである。

しかしながら、発言を羅列しているので若干読みがたいのを事前に申し上げます。

【私】 かしなんだって今さらこんな会議なんて始めるんだ？

【片岡】 いいじゃないか面白ければ。いやがらせを考えるとということだろ？

【塚田】 断じて否。正義の鉄槌だ。これは聖戦である。

【間宮】 うむ。迷える我々子羊に希望の光だの。

【中村】 まさしくもってそうであるな。諸君。

【加藤】 えっ？お前ら何者？

【塚田】 メサイア。いわゆる救世主。

【間宮】アイカンナツスピークジャパニーズ。

【林】日本語で話せ、日本語で。そしてそんな滑舌のいい英語があるか。そしてわざわざ英国風にいうな。さつさと故郷に帰れ。

【加藤】よくそんな長い台詞がまずにいえたな。

【中村】素晴らしいぞ！感動した！

【林】うるさい！黙れ！

【加藤】いい加減本題にいこうよ。話が進まん。これが俺たちの高校時代からの悪い癖だ。少し仕切るぞ。で、塚田はなんでスーツなんだ？

【林】そこじゃねえだろ！そこじゃねえだろ！本論は！

【中村】大事なことから2回言っただけですね。

【私】相変わらずカオスだな。

【塚田】ノー、カオス。ケイオス。ケイオス。リピートアフターミー。ケイオス。

【私・間宮・中村・片岡】ケイオス

【林】進歩無いにもほどがあるだろ！高校時代から！いい加減あきらめてるわ……

【私】それは褒めているのか？

【林】褒めてねーよ！ぜんぜん褒めてない！

【加藤】大事なことから2か

【林】褒めてねーよ！

【中村】3回目きたー！

【林】うるせえ！何もきてねえよ！

【私】ところで間宮、そのサキイカどこから出したの？少しくれ。

【間宮】俺のものは俺のもの。欲しければリピートアフターミー。
ケイオス。

【私・片岡】ケイオス。

【間宮】どうぞ。

【私・片岡・塚田】ありがとう。

【間宮】塚田、お前は言っていないだろ。やらんよ。

【林】話を！すすめるおおお！

【片岡】そう怒るな林。禿げるぞ。

【林】……

【中村】あ、黙った。効果はテキメンだ！！

【私】で、どんな嫌がらせをしよう。

【片岡】いい加減話しを始めないとな。そうねえ…うん。ふんどし祭りとかどう？チヨコレート売り場を我々がふんどし姿で練り歩くの。すり足で。

【私】ポリス沙汰だろ、常識で考えれば……

【片岡】いや、100人くらい集めれば大丈夫じゃない？

【加藤】それだともうテロだな。SWAT沙汰だ。この会議はテロ集団の指定を受けます。

【私】テロリスト首謀者には厳しい刑罰が待っていると聞く。首謀者は塚田になるのか？

【片岡】多分。むしろそうになったら俺たちで塚田を差し出そう。

【加藤】そうしよう、南無。

【塚田】差し出されよう！！

【私】やる気だな、じゃあそれで。

【間宮】ふんどし祭りは、ふんどしが手に入れないと話しが始まらない。
ない。

【中村】ふんどしが売っている所なんぞ知らんよ。どっかある？

【私】知らんな〜。

【間宮】さすがの俺もふんどしを人数分は持っていない。

【私】あ、一応持つてはいるんだ。

【間宮】ちょっとした趣味なんだなこれが。ふんどし。

【塚田】そこはまあどうでもいい。

【間宮】もうちょっといいじってよ。

【塚田】ドMの男を弄繰り回す趣味は無い。

【片岡】しかし女には相手にされない。

【塚田】喧しいよ。

【間宮】なんか一生分のふんどしって言う言葉を口に出した気がする。もうふんどしはいいや。ふんどしから離れよう。いやもうちょっと言っておこうか。ふんどしふんどしふんどし。

【片岡】まあね。何かを購入して何かアクションを起こすこと自体この会議の趣旨からは遠くない？俺、金無いよ。

【間宮】いや、今回は特別だろう。塚田がはじめてやる気を出したんだし。なあ塚田。

【塚田】まあなんだっていいよ。もう飽きた。

【中村・加藤】はやつ!!

【私】お前がそんなんじゃないだめだろ!

【中村】むーん……こうさ、カップルが集まる公園とかになんか仕掛けたいよね。

【加藤】初めて本論から外れていない建設的な意見が出たな。やるな中村。

【中村】流石俺。

【林】内容は不健全だがな。

【片岡】バカ、それがいいんだよ。

【中村】こうさ、カップルが集まる公園でいきなり殺陣をはじめるのはどう? 模擬刀振り回して。

【私】やっぱりポリスのお世話になりそうだな……

【塚田】つか、それただのアトラクションじゃねーか? うまくいったら拍手喝采。喜ばしてどうする。

【間宮】うーん、たしかにそうだな。ダメか。

【加藤】ここで片岡がこの停滞した会議に希望を与える救世主のとき一言を発した!!

【片岡】 ケイオス

【中村】 さすが片岡、分かってる。錆び付いていないな。

【塚田】 もうね、様式美だね。なんだろ、横綱の土俵入りみたいな。

【林】 ……

【片岡】 あ、林がキレかけている。少しは花も実もある話をしようよ。

【加藤】 というか、俺、彼女いるんだけどね。

加藤の最後の発言が場の空気を一変させた。

その言葉が出た瞬間の空気を例える言葉を持たない。

あえて言うならば液体が一瞬で凝固した瞬間といえる。

例えがよく分からないのは自覚している。

七人みさき その3

加藤は普通の笑顔で発言をした。

屈託の無い、いつもどおりも笑顔。

AVのことを公言しなければ、普通に女性にモテそうな爽やかな顔。我々はその笑顔に、嫉妬と殺意と憤怒がない交ぜになった視線を送った。

それは、まさに射るような視線、という言葉がしつくりと来る強さであった。

それが6人分。

一種兵器、レーザービームとなりえるほど強い視線群であつたろう。

加藤の表情が見る見る強張っていき、「しまった」という表情となつていった。

そして我々はどんどん憤怒の表情に変わっていく。

今であれば、地獄の閻魔にその表情だけで天国行きを言い渡されるほどであろう。

出入り口を確認する加藤。

眉間にシワを寄せて睨みつける我々。

出入り口にちらちらと視線を送る加藤。

熱気、怒気から男汁が出そうになる我々、男汁の詳細は不明。観念したのかうつむく加藤。

さらに男汁を放出する我々、男汁が熱気で気化しそうである。

その時、加藤が「あれ？」と天井を指差し、加藤以外の全員が指差された方向を見た。

それはさながらミーアキャットのような有様であった。

脱兎のごとく駆け出す加藤、出入り口からそのまま玄関へ。

玄関に鍵をかけておくんだったと後悔する私。

玄関から外に逃げ出す加藤とそれをバタバタと追う我々。

その絵はさながら、ヨモツヒラサカでイザナギを追う黄泉の国の亡者のようであつただろう。

ただしイザナミはどこにもいない。

逃げる加藤、追う我々。

そして虚空を飛び交う言葉と言葉。

「加ああああ藤おおおおお！！！！」

「紹介してくれええええええ！！」

「どこで知り合つたああああああ！！」

「裏切り者おおおおお！！」

「腹減つたああああああ……」

「田を返せええええええええ！！」

走りながらの言葉であるため、誰がどの言葉を発しているのかまでは判然としない。

しかしどうやら泥田坊は混じっているようである。

どれくらい走ったかは分からないが、最初に間宮が脱落。

スポーツの得意な間宮であったが、巨漢にとって走ることはさすがに辛かったようである。

その後、中村、片岡が脱落した。運動不足がたたっているな。

私はもう少しがんばったが、いい加減走りつかれた。

足が棒のようであり、私は諦めることにした。

林、塚田はまだ追っていったようである。

やつらを突き動かすものはなんであろうか、憤怒か嫉妬か。

ともかく私は家に帰ることにした。とりもなおさず早く飲み物が飲みたい。

家に付くとすでに居室には間宮、中村、片岡が待つており、床にはサキイカが散乱していた。

誰も片付けようとしなのがなんとも苛立たしい。

しかし今は皆、息が上がっているのだからあまりとやかく言う気は無い。

皆いまだに呼吸が荒く、口から出ている息が熱いのが目で見て分かる。

しかしこいつらはいつの間に帰宅していたのか。

なおかつ、私はどうやら私は鍵を閉め忘れたらしい。

そこまで激昂していたのか。

ともかく私たちは上がっている息を落ち着けるため、深呼吸をした。そして台所に行き、冷蔵庫からポカリスエットを取り出し、脱落者の待つ居間に運んだ。

間宮の顔から流れる汗は、ナイアガラの滝、もしくは燻された豚肉から滴る肉汁のようであった。

これは早めに水分補給が必要であろう。

私がポカリスエットを皆の前に差し出すと、皆これはもう強奪とい

えるような勢いで手に取り飲み出した。
飲み終わり全員が一息ついたところで、私たちは林と塚田を待つことにした。

程なく塚田が帰ってきて部屋に大の字になった。

さらに林がその後しばらくあってから戻ってきたが、なぜか胸のところが泥で汚れていた。

諦めたらそこで試合終了という言葉があるが、そこまで頑張らなくても、と思った。

なんといつても泥を我が家に持ち込んで欲しくは無かった。掃除をするのは私だ。

林の帰還後少したって、全員の呼吸が整った。

最後まで整わなかったのが間宮なのが痛々しい。

これで加藤以外の全員が揃ったことになる。

唐突に塚田が「加藤おめでとう」と発し、拍手をした。

パチパチパチ

「加藤おめでとう！加藤おめでとう！！」
本人不在のまま送られる加藤への拍手。

パチパチパチバチバチバチパツチンパツチンポンポンゴッゴッパチ
パチパチパコパコパチパチ

拍手ともいえないような音も響いたが、拍手は少しの間続きそして止んだ。

さて、この後どうしようか。

私は嫌がらせもどうでもよくなってきており、おそらく他のメンバーもそうであろう。

全員目が虚空を捉えていた。

おもむろに間宮は牛丼を食い始め、咀嚼音が部屋に響き渡った。しかしまだ食うのかこいつは。

片岡は「人生について考察する」と座禅を組み、瞑想を始め、中村もなぜか同じことを始めた。

塚田はネクタイの緩みを直しすくと立ち上がった。

そして、再度独身貴族を見渡すと、初めと同じように朗々と堂々と語り始めた。

語り始めると同時に、中村と片岡がすーっと目を開け、片岡は少し涎をすすった。

「諸君。我らが同胞加藤氏が、伴侶を見つけてこの独身貴族円卓会議より爵位を自ら捨てていった。これは独身貴族たる我々に対する挑戦とも受け取れる。しかし加藤氏ともそれなりに長い付き合いであり、何よりこの毒の沼地からの生還者である。これは喜ばしいことである。皆、拍手をしてくれたが、これは大変喜ばしいことであり、誇りに思うことである。」

続いて林が立ち上がり、話し始めた。

「今後加藤への意趣返し、仕返しなどは絶対に行ってはいけな
いと議決したいと思う。それがあいつへのせめてもの餞だ。異議ある
やっは、今この場で立ち上がってくれ。」

そして誰も立ち上がらなかった。

加藤、幸せになれよ。

祝福あれ。

林が再度話し始めた。

「OK。それじゃあ加藤への意趣返しは一切行うな。意趣返しをし
たら、それ相応の天罰が落ちてくるぞ。具体的には俺から必殺の関
節技、パロスペシャルを食らうはめになる。」

塚田と林の演説が終わったが拍手は起こらなかった。

皆がうつむいているのはパロスペシャルをかけられた自分を想像し
ていたのだろうか。

意趣返しをする気は無くてもパロスペシャルをかけられている自分
を想像してしまうのは、30手前の男たちの性なのかもしれない。

林は座った。

塚田はいまだ立っていた。

塚田はまだ言いたいことがあったようであつた。

「しかし諸君。円卓会議のメンバーが一人減つてしまった。ここは1人程度の補充を行いたいと思う。なぜなら長いこと7人でやつてきたのである。6人というのはなんともすわりが悪い。やはり7人がいい。そこ、10年ぶりとか言うな。魂では我々はつながっている。ソウルメイト、ソウルフレンドではないか。さて、貴族補充については独身貴族であれば誰でもいい。自薦他薦問わない。皆の友人でもこいつなら！と思う人の5人や10人いるであろう。そいつらを引きずり込むのである。なんなら知り合い1人を破局させて独身貴族にしてしまえばいい。加藤とか。目的のためには手段を選ぶな。この毒の沼地に、生贄をささげるのである！！我らは独身貴族である！！」

塚田　…　嫉妬

語りに語つた塚田は満足げな顔をしていた。

鼻が鈍い光を放っていたのは、脂汗だろう。多分あれが男汁である。男汁が出てくるまで、熱を入れる必要があつたどうかは甚だ疑問である。

しかし塚田がすつきりしていればいいのだ。

見るがいい、あの満足そうな顔を、つやつやではないか。

そしてあそこまで言い切れれば立派なものであり、敬服感すら覚える。

来年の悪魔ドラフト会議では間違いなく1位指名されるであろう。4球団くらいから。

林が首を左右に、小刻みにひねっていた。

そして一度うなずくと林はゆっくりを確認するように、「それって加藤に対する意趣返しじゃねーか？」と言った。

凍りつく時間。

色を失う塚田。

現在目の前に広がる光景は、そのおぞましさのため詳細に語ることはご勘弁願いたい。

少しでも申し上げれば、くんずほぐれつ、まさに男地獄である。

そして私はその光景を見ながら、今年の流行語大賞は「加藤とか言っていないから！佐藤って言ったの！佐藤！」であると、確信するのであった。

九十九神 その1

塚田が男地獄で刑罰、パロススペシャルを受けてから、ちょうど1週間が経過した。

林から必殺の関節技を喰らった後の塚田は、それはもうぐったりとしていた。

その有様は、私に打ち捨てられた秋刀魚を連想させた。

そんな様になりながらも、左足だけが天を突いていたのは唯我独尊的な心意気であろうか。

塚田は必殺技を食らったわけであるが、体はその後何も無かったただろうか。

心は強化ガラスの強度でありながらも、体は不健康そのものであるため心配にならないといえは嘘になる。

そう思っていた矢先、中村から電話がかかってきた。

中村によれば、塚田はあの日の翌日から接骨院に毎日のように通っている、とのことである。

なんでそんなことを知っているのか？と中村に聞いたところ、中村の勤務先はその接骨院なのだそうだ。

こいつは顧客の個人情報を守る守秘義務という言葉を知らないのかと思ったが、まあ友人のことだからよしとしよう。

それにしても接骨院に通うことになるとは、パロススペシャルの威力とはかくも凄まじいものか。

肉がうなりを上げ、骨がきしんだのかもしれない。

林、少し自重しろ、手加減しろ。

しかし中村によれば、塚田は初日こそ体が悪そうであったが、翌日からは受付の女の子に鼻の下を伸ばしに伸ばしている、ということであった。

なんだそれが目的か。

その塚田の分かりやすさは尊敬、賞賛に値するが、中村は「なんだあいつは」と、憤っていた。

同じ職場の女性に声をかけられたことに対する憤りかと思われたが、「三次元、現実世界の女に鼻の下を伸ばすとは独身貴族の風上にも置けない」と、違う方向で憤っているらしい。

別に独身貴族は二次元の住人ではないぞ、と突っ込みたくなったが、発言者がフィギュア好き、二次元の住人である中村である為、意識的にほうっておく。

これは突っ込んだら負けだと思われるが、皆様どう思われるか。

中村について記す。

中村は一言で言うならオタクである。

それ以外の何物でもない。

ぽっちゃりとした体型、カブトムシを連想させるテカった黒髪、牛乳瓶の蓋に揶揄される黒縁メガネ。

中身の方は、30分のあらずじを1時間にわたり解説してくれる知識、時間短縮のため恐ろしい速度で回る口、好きなものに対するその偏愛、などなど。

語れば語るほど絵に描いたようなオタクである。

中村が得意とするジャンルは、マンガ・アニメ・ゲームであり、そのどれをとっても一級品の知識を持っている。だけれどケンカはからっきしの三級品である。

そんな彼は、無論アニメやマンガはよく見、そしてゲームもたくさん遊ぶ。

しかしものすごい量を購入するため、もちろん全てを消化しきることとは出来ずに、部屋の中に平積みされている。

その積み本積みゲームはちよつとした山のようにあり、中村山なかむらさん古今に比類なし、と古今和歌集に詠われたほどである。

踏破するのも一苦勞なうずの高い山である。

そして、もう一つ収集しているものはフィギュアである。

ロボット、美少女、アメリカンコミックなど何から何までフィギュアを集めるのが好きなのである。

これもまた恐ろしい量を購入し、部屋に飾り散らしている。飾り散らしているとは凄まじい表現であるが、フィギュア保管の為にだけにアパートを借りていることから、私の表現は決して行き過ぎではないと思われる。

普通そこまで金をつつ込めば、両親や友人からストップがかかるものであるが、彼の場合はどこからもストップがかからない。

なぜならば、生活費から趣味の金までとにかく何から何まで全部自分で稼いでいるからである。

定職についているし、なによりも彼は一時期はそこそこ儲かっていたデイトレーダーであった。

そのため年のわりにたくさんのお貯金がある。

株が紙くずになった私とは雲泥の差である。

金はあるのだが先述のとおり、「現実世界の女に興味は無い」と公言するような、恐るべき硬派な男、中村。

中村は、他の独身貴族どもとは少し違い、もう女性とは結婚できない男なのである。

いっそ清々しい、いやむしろ清々しいを貫通して禍々しい。

中村についてはおおよそご理解いただけたかと思うので、話を現実に戻そう。

中村とひとしきり塚田について話し合った。

最終的に塚田には独身貴族円卓会議でその行く末を発表させる、ということが決定した。

そしてもう一つ決定した。

本日夜、中村のフィギュア部屋に行き、そこで酒を酌み交わすという運びとなった。

私はフィギュアに興味はないのであるが、酒を振舞ってくれるというのだから行かない理由はない。

悲しいことにどうせ暇だ。

おそらく中村も語りたいのであろう。

自慢のフィギュアに囲まれながら。

さて、中村のフィギュア部屋は、我が家より車で15分ほどのアパ

ートである。

歩いていくには少々距離があり、車で行けば駐車場の問題が出てくる。

遊びに行つて駐車禁止を取られてしまうのは気持ちのいいものではないし、なにより財布が風邪をひいてしまう。

しかし中村はなんと、車で迎えに来てくるというのだ。

こいつは重畳である。

アシ付きとはどこかの業界用語であるが、移動の面倒が無いというのは大変楽ちんである。

それから1時間15分後の夜11時、中村から到着した、と電話が入った。

私は中村の車がどんなものか、とても興味があつた。

もしやテレビなどに登場する、美少女キャラの描かれたいわゆる痛^{イタ}車^{シャ}ではないかと期待していたのだ。

そんな私の期待をよそに、中村の車は普通の白いワンボックスカーであつた。

痛い車ではなくちつとも面白くないのであるが、質実剛健、自分の趣味以外には一切金を使いたくないという意思が見え隠れし、さすが中村と賞賛と感嘆の拍手を送りたくなつた。

それにしてもこの車、みるからにおんぼろであり、なおかつ汚い車である。

ワザと古くて汚い素材ばかり使つて製造しました！といわれても諸手を挙げて納得するような風情である。

そうこうしている間に、程なくして中村のフィギュア部屋に到着し

た。

中村の借りている部屋は7、8畳ほどのワンルーム、そして車に負
けず劣らずのボロアパートである。

私が入るのは2回目であるが、過去見たときよりもフィギュアの数
が明らかに増えている。

以前は窓があつたが、今では窓がどこにあるのかよく分からない。
フィギュアの置かれた棚で隠されているのである。

ショーケースに飾られているわけでもなく、むき出しで飾られてい
ることもあいまつて、視界の360度フィギュアフィギュアフィギ
ュアである。

フィギュアの保管してある部屋ではなく、フィギュアで作られた部
屋というほうが正しいのでは、と思う。

厳密には360度のうち、270度がフィギュアであり、残り90
度はにやけ顔の中村と絨毯である。

先ほども申し上げたがフィギュアの種類にも取り止めが無い。

美少女が多いようであるが、アメリカンコミックものもあるようだ。
美少女フィギュアの横に、筋骨隆々でピッチリしたタイツを着てい
るむさい男が並んでおいてある。

そして懐かしのキン肉マン消しゴムまであるところを見るに、やは
りさすが中村といいたい。

惜しむらくは、パロスペシャルのキン消しが無いことである。

減点1である。

なお読者諸兄、そろそろフィギュアという文字が鬱陶しくなってきた頃であると思うが、もう少しだけ我慢していただきたい。

さてとりもなおさず酒宴と中村フィギュア独演会の開始である。

さすがに金を持っている男なので、日本酒洋酒東西様々な酒が出てきた。

つまみは燻製肉である。

見たことの無い酒ばかりでありどれから飲んで良いかよく分からなかった。

私がどれから飲もうかと迷っていると、中村がついと一つの日本酒を差し出した。

とりあえず中村が差し出したそれを、恐る恐る口に含み飲み込む。

これは旨い、いや、本当に旨い。

日本酒というのは、もっと甘ったるくアルコール臭いもの、というのが私の持っていた感想であるが、中村が差し出したこの日本酒は大変爽やかでフルーティーである。
飲み込めば冷たかつ暖かいものが喉を伝っていくのが分かる。

旨し。

もうこの時点で中村に感謝である。

フィギュアの話しごとき、どれくらいでも聞いてやろうという気概が巻き起こった。

さあ独演会よ、かかって来い。

中村が話し始めて15分後、すでに私はフィギュアの話に飽きていた。

自分の興味範囲外の話というのは、やはり苦痛なのである。

中村の弁舌が熱を帯びるに従い、私の目は虚空を捉えていった。

30分経過。

それにしても酒が旨い。

中村の話が無ければなおさら旨かったであろう。

45分経過。

私はなぜか正座していた。

どうやら苦行スイッチが入ったようである。

一切皆苦。

60分経過。

私は中村に、全ては空であり無である。

あなたの持っているフィギュアも空なのですよ、と説法したくなかった。

どうやら私は涅槃にたどり着いたようである。

私は日常生活で、何度涅槃にたどり着けばよいのであろうか。

75分経過。

この世と酒は、切っても切れない間柄なのだ。

イスラムや仏教では酒は禁止だそうだが、日本でも神様にはお神酒を捧げるし、キリストも最後の晩餐でぶどう酒を掲げていたではないか。

ローマ神話にはバツカスという酒の神様も出てくるし、他にも酒の神様はたくさんいるのであろう。

ああもう、うんちくはいいや、酒だ、酒もってこい。

この世に酒以上価値のあるものなんざあるものか。

90分経過。

私はうなずくだけの機械となり、うとうとし始めた。

順調に身体の機械化が完了した私の頭に、ポコン、と何かが当たった。

落ちたものを見てみると、どうやらそれはガチャガチャで当たるような消しゴムであった。

これはガンダムというものであろう。

どのシリーズなのかはガンダムには詳しくないのでよく分からない。とりあえず拾った消しゴムは適当に床に置いておいた。

ポロン、つと音がしたような気がする。

まあこれだけの量があるのだから、一つや二つ落ちてくるであらう。

そうして、またもやうとうとしていると、またもや頭にポコン何やらあたった。

どうやらまたしても消しゴムである。

そしてそれをポロンと床に置く私。

数分後、またしてもうとうとポコンポロン。

なんだよもう！！

なんでこんなに落ちてくんだよ！！
つか、どっから落ちてくんだよ！！

ドリフのたらいか！？

くしゃみなんぞしてねえぞ！！

うきいいいいいい！！！！

上を向いて見れば、消しゴムが棚の上からこちらを睨み付けている
ようである。

人間の尊厳という言葉が頭をよぎる。

しかしやつらは何故に私の頭にカミカゼアタックなぞ仕掛けるので
あろうか。

死なぬと分かっているカミカゼアタックは非常にうざったい。

そんなことを考えながら、また私はうとうとし始めた。

頭上に気配、いや殺気を感じ手で払いのけると、手にポコンと何か
が当たった。

先を見てみれば、案の定消しゴムであった。

なんであるうかこの奇々怪々な現象は。

私がつとうとすると、「ご主人様の話を聞け！」とばかりに、消
しゴムが私めがけて落ちてくるのであるうか。

否、そんなことは無い。

この科学万能の時代、そんなこと奇妙奇天烈なことがあつてたまるか。

しかし気味が悪い。

さつさと中村の話は終わつてくれないだろうか。

それからの私は目が冴えてしまい、中村の話を最後まで、余すことなく聞くこととなった。

中村が語り始めてから、遂に2時間が経過した。

中村は汗をかき、声を枯らし、齒を食いしばり、あらん限りの力をこめ、言葉をつむいでいた。

どうやらこれから中村最後の心の叫びを発するらしい。

うとうとしないように気を配りつつ、その話しに耳を傾けた。

「人を模したものには魂が宿するという。また長い年月を経た道具に神が宿る付喪神の伝説もある。万物に聖性を感じ、敬い、感謝し、愛でる。物をただの物体で終わらせない、これが日本人のよき伝統ではないだろうか。私はこの古来からの日本人の美德を忘れない。だからこそ、私はフィギュアを愛し続けるのだ！」

そう言つて中村は、拳を握り空に向けて突き出した。

その光景はなぜか神々しくうつり、私は思わず拍手しそうになった。中村が何を言っているか全く理解できなかったが、それはそれは硬い決意を感じた。

この決意の硬さは、もう侍といつても過言ではない。

でもフィギュアでなくても良いじゃないかな、おじさんはそう思う

よ。

そう思っていた矢先、地震が起きた。

瞬間的に私の心臓は大きく脈を打った。

ぐらぐらと大きく揺れている。

体感震度として3くらいだろうか。

しかし特に地震に詳しいわけではないのでよくわからない。

3という数字もなんとなくである。

この地震が強い地震なのかどうか分らない。

しかし部屋中のフィギュアがなだれを起こし、中村を飲み込む程度の強さではあった。

このボロアパート、振動に弱いのだろうか。

もしかしたら、先ほどのうとうとポコンポロンも細かい地震の賜物なのだろうか、そんなことが頭をよぎる。

不思議なことにフィギュアたちは、中村に群がるように覆いかぶさっていた。

私には頭にポコポコとフィギュアが当たる程度であった。

数秒ほどの後地震は緩やかに終わり、そしてかつて中村だったものは、フィギュアの塊と成り果てた。

そう、成って果てた。

フィギュアの塊から突きでている腕は中村の腕であろう。

拳は天上めがけて突き出されている。

なぜか、「愛だろ、愛」というフレーズが私の頭をよぎった。

九十九神 その2

中村がフィギュアの塊に成り果てた翌日の夜。

私は家の大掃除をすることにした。

というのも、あの地震で自宅の2階が壊滅的打撃を受けたからである。

1階は比較的無事であったが、2階は日ごろ使っていないこともあり、なんというかこう、言葉では形容しづらい様相を呈していた。机の引き出しを引っ張り出し、中身を全部床に散らかしたような、といえば分かりやすいだろうか。

大掃除は件の化け猫騒動以来であるが、現在の状態はあの騒動後よりも凄まじい。

自然の力というのは妖怪物の怪の力を凌駕するのである。

まあ言葉を発していても床が綺麗になるわけではない。ともかく手と足を動かさなければならぬのだ。

まあ言葉を発していても床が綺麗になるわけではない。ともかく手と足を動かさなければならぬのだ。

掃除機、雑巾、ゴミ袋そしてビニール紐を持って2階に上がり、清物を片付け、いらないものをゴミ袋に詰め、袋の口を縛り、掃除機をかけ、汚れの酷いところは水拭きをする。

そんな単調な作業が進む。

それにしても物が片付いていく様子というのは気持ちのよいものである。

一種の爽快感を私は感じていた。

さて掃除をしていると懐かしいものを見つけ、それに心奪われて作業が止まることがあるだろう。

読者諸兄身に覚えは無いだろうか。

いやあるに違いない、ここは断定させて頂く。

そしてお察しのとおり、現在の私もそのようなものを見つけ、手が止まっている。

まず手始めには、中学校の卒業文集が見つかった。

まだ私が麒麟児天狗、そして髪の毛のことなど微塵も気にしていない頃のものである。

文集を開いた私は、懐かしさに体がむずむずした。

当たり前のことだが皆若い、いや若い。

そして自分を発見したとき、恥ずかしさの余り、すぐに文集を閉じてしまった。

一時の感情に流されたとはいえ、これはあけてはいけないパンドラの箱だ。

ワインのように、とことんまで熟成させればなんとかいけるかもしれない。

しかしあの頃の自分を笑い飛ばすには、私はまだ若すぎるようである。

とにかく碌な思い出なんぞありはしない。

次に発掘されたものは、15年も昔の少年ジャンプであった。

巻頭カラーはスラムダンクであり、懐かしさに涙が出そうになる。

そういえばあの時、みんなバスケットシューズを履いて登校していたなあと思い出す。

バスケット部は大盛り上がりで部員確保も簡単だったはずだ。それもこれもスラムダンクの影響に間違いない。

当時中学生、高校生の頃が思い起こされた。

しかしやはり碌な思い出が蘇らなかったもので、早々に意識に蓋をし、お札を貼り、無意識の海の底に沈めることにした。

少年ジャンプには罪は無い。

すべては私の罪である。

なんとも罪深い人生を送っているものだ。

いや恥の多い人生か。

さて、次に見つけたのは将棋盤である。

木製で脚は無く、ぱつと見少し薄めの板である。

黒茶け、色あせた盤面が時代を感じさせる。

今は亡き祖父、私はじさまと呼んでいた、曰く、江戸時代だったか明治時代から存在する年代物である。

今なら価値も少しは上がっているかもしれない。

不意に盤を裏返してみると、ドラゴンボールのシールが貼ってあった。

間違いなく幼き日の私の仕業である。

過去の自分は、物の価値が分からない男であったことを再認識し、自分の阿呆さ加減にほとほと愛想が尽き果てる。

まあ今年だけでも6度は愛想が尽き果てているのであるが。

さてこの将棋盤は、じさまの所有物であり、じさまが亡くなる少し

前に譲り受けたものである。

物語は私がこの将棋盤を見つけたことで過去にさかのぼる。
少し私の昔話に付き合っていただきたい。

じさまは趣味の人であつた。

将棋、華道、茶道、柔道、工作、絵、麻雀、そして歌に読書となんでもござれな人であつた。

他にも食品などにも通じており味噌などの発酵食品を自分で作っていた。

じさまの趣味の中で、特筆すべきは柔道と将棋である。

柔道の腕前は中々の腕前だったらしく、年をへて足腰が弱るまでは近所で柔道を教えていたそうだ。

教えられるくらいであるから、腕は推して知るべし。

更にはその武勇を伝える逸話もあるので、私がじさまから直接聞き、知っている範囲で紹介したい。

剣道の有段者と立会った時、面を白羽取りしてそのまま投げ飛ばした。

じさまがまだ若い時、修行の為に山籠りをしていた。

その時天狗に勝負を挑まれた。

猛然と襲い掛かる天狗を見事にさばき、そしてこれを大外刈りで斬って落とした。

じさまの道場に大男が道場破りにやってきた。

じさまは普通の体格であり、体力差はまさに大人と子どもであろう。

まともに戦っては勝てないと思い、ここは将棋道場であると手八丁口八丁で丸め込み、将棋の勝負に持ち込んだ。そして三間飛車で斬って落とした。

この話を聞いて皆様どう思われただろうか。

まず間違いなく適当な人間だと思われたであろう。

その判断は正しい。

最後の逸話にいたっては柔道ですらないし。

じさまはいい加減な人なのであった。

じさまといえば、もう一つは将棋である。

これは掛け値なしに強かった。

私自身が、柔道の強さは体験していないが、将棋の強さは体験をしたからである。

大男を言葉で丸め込んだ後のじさまは、将棋ではまさしく鬼神のとき蛮勇を奮ったであろう。

私はじさまと100を超える回数、将棋で対局をした。

しかし一度も勝ったことが無かった。

数度惜しいときもあったが、それでも最後には負けてしまう。

余りに負けが込んできて頭に來、麒麟児の全能力を賭して将棋に打ち込み再度勝負を挑んだ。

でも全部負けた。

それほど強かった。

じさまは将棋に勝つと、まるで子どものようにニヤニヤと、意地の悪そうな笑みを浮かべる癖があった。

さらに決め台詞があり、「修行」が足りんわ!」と勝ったびに言う。

「行く」のあとをやけに伸ばすのが、ものすごくうざったく腹立たしかった。

それが将棋の勉強をさせる原動力となった。
思い出したらなんだか腹が立ってきた。

まあいずれにしても、将棋は強いじさまであった。

山で天狗を投げ飛ばしたのは嘘に違いないが、私という麒麟を将棋で打ち倒したのは本当である。

あ、まさか天狗というのは、鼻っ柱の高い柔道家という意味だったのだろうか。

それであれば、私はじさまに謝らなければなるまい、ごめんなさい。

話しが長くなったが、じさまとの将棋でいつも使っていたのがこの将棋盤なのである。

将棋なんぞ久しく指していない。

しかし目の前にある将棋盤は、じさまとの思い出を思い出させた。
たまには詰め将棋でもやってみようか、これも何かの運命かもしれない、と思うのにそう時間はかからなかった。

早速私は将棋の駒と、詰め将棋の本を買ってくることにした。

将棋の駒をホビーショップで買った。

¥400ほどの安い、プラスチック製の駒である。

ホビーショップの店主は、頭頂部の綺麗に禿げ上がった老紳士であった。

鉄腕アムの御茶ノ博士にそっくり、というイメージしやすい

かもしれない。

他には読者諸兄にお話しして喜んでもらえそうなことは見当たらなかった。

次は詰め将棋の本を買おうと、この辺りでは大きい部類に入る書店へ向かった。

程なく到着し、書店の自動ドアより私は中へ入る。

趣味のコーナーはどこであろう、ときよろきよする私。

その目に飛び込んできたのは、どうみても間宮な巨大な人影であった。

厳密には顔を見ていないので分からないが、周りの人よりも頭2つ分は大きいシルエットは、この片田舎では少ない。

間宮でまず間違いないであろう。

私は声をかけるようかどうするか少し考えた。

万が一人違いであったならば少し面倒なことになるからである。

私は以前、加藤と思って肩をポンとたたいたら、全く見も知らぬ「女性」であったことがあり、冷や汗を流したこともあるからだ。

ともかく顔を確認するべく私は巨漢に近寄り、その横で立ち読みをすることにした。

間宮であれば声をかける、間宮でなければそのまま立ち去る、そういう段取りである。

私は近づいていった。

近づいてみて分かったことだが、間宮らしき人物がいるコーナーは、その、なんとというか「萌え」というジャンルを集めたところなのだろう。

その一角だけ色彩が鮮やかなピンクである。

ともかく目的優先である。

巨漢の顔を横目で見やると、おそろしく集中力を発揮して雑誌を読んでいる間宮であつた。

なにやらニヤニヤしており、気持ち悪い。

もう一度言つ、気持ち悪い。

間宮は自分の顔を覗かれていること察知し、こちらを向いた。眉間にシワを蓄えた私と目が合い、間宮は怒りと悲しさを湛えた、えもいわれぬ表情を浮かべた。

おそらく一番プライベートな時間なのであろう。スマン。

私は間宮と少し本屋で立ち話をし、本屋に来た経緯を話した。

将棋が間宮の心の琴線に触れたようである。

なんでも最近、将棋のマンガにはまっているようであり、将棋の勉強もしているのだそうだ。

そんなこんなで、あれよあれよと言う間に間宮と将棋をさすことになった。

間宮は一旦家に帰宅後、我が家で落ち合うこととなった。

私もとりあえず帰宅することにした。

私が帰宅してほどなく間宮が到着し、早々に将棋を始めることにした。

ぱちぱちぱちぱち、と駒が小気味よい音を立て並べられていく。

じゃんけんの結果、私が先手をさすこととなった。

7 六歩

8 四歩

7 八銀

3 四歩

ぱちぱちぱちぱち・・・

将棋に詳しい人ばかりが、この文章を読んでいるとは思わないので詳細は省く。

その後数十手指した結果をご報告申し上げます。

一言で言つと、めっちゃ負けそう。

まあ間宮は現在将棋勉強中、私は昔取った杵柄で勝負をしているわけであるから、普通に考えてみて勝つことは難しいであろう。

現役の高校球児と、引退しておっさんと化した元高校球児で野球勝負をしているようなものであるから、自力からして勝負にはならない。

しかし私の天狗の鼻は折れきっていない、早い話が負けず嫌いである。

そうやすやすと負けたくは無いが、やっぱり劣勢であることには代わりは無い。

俄然攻め立てる間宮。

脳みそをフル回転させて守る私。

あまりに頭を回転させ、耳から煙が噴出しそうな私。

そしてとうとう私は、どう指していいものやら分からなくなった。八方塞りという状態である。

間宮の顔には、それはそれは爽やかな笑顔が浮かんでいた。

肉食獣はエサを前にすると敵意がなくなり穏やかになるというが、それはこのような表情なのかもしれない、と思った。

しかし私はエサではない。

その時、ふと駒が升目からやけに大きくずれていることに気がついた。

よく見てみれば、所々そういう駒がある。

私たちはプロ棋士ではない。

そうそう綺麗に駒なんぞ並べてはいないが、それにしてもずれが大きい。

もしや少し将棋盤自体が削れており、傾斜がついているのかもしれない。

じーっと駒を見ているうちに、そのずれた方向に駒を動かしてみたかどうか？と思い至った。

なぜそう思ったかはわからないが、どうせ八方塞りである。

溺れるものは藁おも掴むというが、このような気持ちであったのかもしれない。

ええい、ままよ。

一手。また一手。さらに一手、ずれている方向に指していく。

ぱちぱちぱちぱち・・・

十手ほど指したところで、形勢が逆転した。

嘘のような話であるが、私が有利となったのだ。

間宮の顔が速やかに青ざめ、酒を飲んだときと同じように青鬼と成り果てた。

うん、将棋盤のおかげでここまでこれた。

まさに将棋盤無双である。

あともう数手で詰ますることが出来るだろう。

ここからは自力、将棋盤の力無しである。

駒を見てみれば駒のずれも無い。

駒も言っている、ここまではやってやったから後は自力で勝て、と。

さあ詰ましてやるぞ間宮、覚悟しやがれ。

ぱちぱちぱちぱち・・・

「まいりました」

読者諸兄、予想はしたと思うが、私は負けた。

それはもう、綺麗に、綺麗に逆転されて。

間宮の顔は、勝ったという充足感から赤鬼になっており、私は悔しさで頭の皿が乾いてしまうそうであった。

いや、私の頭に皿は無い、違う、間違うな俺。

間宮は、「勝った勝った勝った〜」とよく分らない歌を歌いながら帰っていった。

大層な上機嫌である。

今煽てれば何か、奢らせることもできそうであったが、そのままスルリと帰って行ってしまった。

悔しい。

本当に悔しい。

あともう少しで勝てるところだったのに。私は将棋を片付けながら、そう細く細かくつぶやいていた。

「修行〜がたりんわ！」

どこからともなく、じさまの声が聞こえたような気がした。

いや、じさまは亡くなっているのですんなわけは無い。

私の脳みそが不意に思い出しただけであろう。

将棋盤にとりついていっているわけでもあるまいし。

さて詰め将棋でもやろうかと思った私はやっとのことで、詰め将棋の本を買い忘れたことに気がついた。

なにをやっているのだ、俺、すっかりしなさい、俺。

私はやはり修行が足りないようだ。

天邪鬼 その1

私の中ではつい先日、「ハッピーニューミレニアム!」「いや21世紀は来年からだから。」というやり取りをした気がする。

私の気をよそに現在はまだ21世紀となつてより、それなりの年月が過ぎ去っている。

年をとると時間がたつのが本当に早い。

さて、私にとって21世紀とは、「未来」を表す言葉であつた。

多分同年代の方には、この心境がご理解いただけたと思う。

同年代の基準としては、先ほどの「ハッピーニューミレニアム!」のやり取りを、あるあるネタとして認知していた、そのことをあげさせていたきたい。

現在は21世紀であり、私はあの頃の未来に立っているのは間違いないのだ。

しかし「私が21世紀と聞いて空想していた未来」と「実際の21世紀」とは、ずいぶんと隔たりがある。

私にとっての21世紀とは、車が空を飛び、銀色のピタツとした服を身につけ、腕時計型のトランシーバーで連絡を取りあい、よくわからない光線の出る銃を携帯し、街はバリアーに守られている、そんな世界である。

無論、未だ車は空を飛んでいないし、銀色のピタツとした服は前衛芸術とは思えないファッションショー以外で見えることはかなわない。

トランシーバーは言葉自体が骨董品として埃を被っているし、光線銃やバリアーに至っては「何と戦うつもりだったんだ？」と、私自らガッツコミを入れたくなる始末である。

他にもたくさん空想をしたはずであるが、私とてそこまで恥をさらしたくないのでここまでとさせていたきたい。

ところで、そのような空想をしていた時分、私は麒麟児と呼ばれていたはずである。

今改めて思い返してみても、自分が本当に麒麟児であつたかどうかは怪しく思えてき、暗澹たる気持ちとなつた。

気を取り直して話を戻すが、私の珍妙極まりない空想、むしろ妄想をよそに、現実の技術進歩は極めて合理的に、そして全く健やかに成されたのだと思う。

しかし、私の脳内イメージとあまり変化がなく、かつ現実に使用されているものもある。

それは電子メールである。これは子どもの頃に思い描いたイメージとあまり変わりが無い。

連絡をしたい時に、相手に即座に届く手紙、これは私の中での未来である。

現実と空想が違う点といえば、メールを開封した瞬間、立体ホログラムが現れて話しかけてはこない、ということくらいか。

しかしこれは、近い未来誰かが成し遂げてくれるもとの信仰している。

絶対に同じような未来を空想した人がいるはずであるから。

電子メールというのは大変便利なものである。

様々な要因があるが、なによりも相手の都合をあまり考えずに送ることが出来る。

電話がかかってきてしまうと、恋人との愛の語らい中でも、トイレで過去に例を見ない強敵を排出中でも、その場で対応を迫られる。しかし電子メールであれば、忙しければ後に回し、暇であれば即座に返信すればよい。

愛を語らっているのではないか？トイレで強敵を通り越して魔王との戦闘を繰り広げているのではないかと気を回す必要がない。

さらに同じ文面をまとめて複数人に遅れるのであるから、会議の招集などにはもってこいである。

ここまで読まれて少し勘の良い方は、「ああ、またあの痛い会議をやるのか。」と思われるであろう。
はい、そのとおりでございます。

あの1件より、独身貴族の面々は頻繁に連絡を取り合うようになってる。

連絡を取り合うというか、頭に浮かんだ珍奇な妄言を相手に送りつける行為が頻繁になった、というのが正確なところである。

例えば一番最近私に入ったメールといえば、中村からの「生キャラメルって、何が生なんだ？」という内容であった。

無論そんなことは私も知らないので黙殺しているのであるが。

かような非生産的、かつ非合理で不健全なことに電子メールを使うのは、文明の利器、ひいては技術進歩をもたらした科学者技術者の

皆さんに対する冒涇ではないかと思うときもある。

しかしもしかすれば、先ほどの「生キヤラメルの生とは何か？」から新しいビジネスアイデアが生まれるかもしれない。

もしや本を出版する方も出てくるかもしれない。

全て可能性はあるが、ないと言い切れない。

この世に無駄なものはないことの証明だ。

さりとて、詭弁というのは自覚しているので、触れてはいただかないよう、伏してお願い申し上げます。

そんな、私が誰に何をどう弁護をしているかよくわからないことをしていようと、メールは唐突に飛んでくるのである。

携帯から着信音がなり、画面に送信者と件名が表示される。送信者を見れば、塚田にパロススペシャルをかけた林である。件名は「招集令状」とあるが、なんとも形容しがたい言葉のチョイスと言わざるを得ない。

林は他の面々に比べて妄言が少ない。

それを鑑みれば、メールの内容は普通に考えて独身貴族円卓会議の招集であろう。

またもやあのメンバーで不毛でろくでもない時間を創造しようというのか。

以下メールの全文を記す。

送信者 林・ザ・ラース

件名 招集令状

本文 みんな知ってのとおり、片岡はもう長いこと無職だ。三十路を前にしてそれはいかなものかと思う。なので、片岡を職に就かせるためにも会議を開きたいと思う。賛同される者は会議会場である塚田邸まで来て欲しい。賛同しないヤツは、地獄の業火で焼かれることになる。

建設的で前向きな内容であるが、なぜ最後の最後だけ、獄門の鬼のような言葉を選ぶんであろうか。

やはりやつも、どこか一風変わった妙な所がある。

さすが独身貴族の伯爵は伊達ではない、無論悪い意味で。なお、ラースというのは憤怒という意味である。

と、ここでいつもどおり人物の紹介をなるわけだが。

しかし皆さん、人間とは迷う動物である。

今回の場合、林と片岡、どちらから紹介すべきか迷っている。

まあぶっちゃければ、どちらから紹介しようとも物語は、同じ結末に行き着くと思われる。

結局両者とも紹介することになるのだから。

例えば、弁当のオカズをどんな順番で食おうとも、腹に入れば等しく消化され、栄養が吸収され、体外に排出されるではないか。結末は変わらないではないか。

ふと思いつきで書いてみたが、全くもってその通りである。

これを「弁腹理論」とでも名づけ、そこかしこで使ってみたいと思う。

なお、「稀に一部未消化の場合もあるがな！」と思われた方は正直に手を上げて欲しい
そしてハッキリ「お下劣！」と罵って差し上げたい。

ともかくこの理論は妙な説得力を持つような気がする。

しかし、ある理論を考え出した場合、それに対して批判する意見を考えなければ片手落ちである。

理論と批判を繰り返すことで、より完成された理論が生まれるかもしれない。

弁証法的に理論は上へと完成していくのである。

なお弁証法の使い方がこれでいいかはわからない。

「とりあえず最近知った言葉を使ってみた感」を感じた方、あなたは正しい。

さて、批判をしてみよう。

少し考えてみて、このような批判を思いついた。

1. 通常、弁当、デザート、食後のコーヒーの順で食すでしょう。
2. 腹に入れば皆同じであれば、順番の前後はさしたる問題ではない。
3. ならば、デザート、弁当、食後のコーヒーの順で食べたいと思うか？

という批判である。

確かに、甘いもののすぐ後に弁当を食べたいとは思わない。

ならば順番というものはとても大事なものであり、腹に入れば皆同じ、というのはおかしい、と思う。

だが少し待っていただきたい。

この批判は、的が外れていると言わざるを得ない。

「順序が変わっても結論が変わらないのは、弁当の中身に対してのみであり、それを取り巻く全体ではない。」

「そもそもこの理論は味覚を考慮してはいない。」
という2点に

読者諸兄、一つお伺いしたい。

「本題以外のどうでもよいことに心がとらわれている様」を表す四字熟語は、「枝葉末節」でよいでしょうか？

話を大元に戻す。

まずはメールを送ってきた張本人、林・ザ・ラースについて記すこととする。

なお、林・ザ・ラースと一々書くのは面倒なので、ここでは林で記述を開始させていただく。

林は中肉中背、少し天然パーマのかかった髪、そしてごくごく普通のルックスを持つ男である。

目が大きいわけでもなく、メガネをしているわけでも、筋骨隆々でもない。

塚田や間宮、中村のように、わかりやすい外見的特長を持つ独身貴族の中では、一種場違いなほど普通の男である。

なお私自身について言えば、自分ではこれといった外見的特長を持つていないと考える。

しかしそれを塚田と中村に申し伝えたところ、鼻で笑われる、という事が起こった。

全くもって、地獄の鬼のごとき無体な振る舞いである。

ここは私の写真なぞ公表して、読者諸兄各々にご判断いただきたいところである。

しかし、万が一、読者諸兄にまで鼻で笑われた場合には、どのような事態が起こりえるか。

私はおそらく、山に籠って仙術を極めようとするか、菩提樹の下で悟りを開こうとするか、あるいは帝都の魔人よろしく、大地震でも起こそうと画策するか

どうにも最近私は、話が脱線しすぎるくらいがある。
少し意識をしながら話を戻す。

そんなごく普通の外見を持つ林であるが、その内面はというと、烈火の激しさを秘めている。

私ではうまくご説明できないので、間宮の言葉を借りることにする。
間宮いわく、「林は怒りを煮詰めて一度気化させて、冷蔵庫で凝固させると出来上がる結晶に、唐辛子を大量に入れて出来た人間であり、その心の火力は炊き立てご飯でチャーハンを作ってもパラリと仕上がる程」らしい。

いや、やっぱりよくわからない。

こんなご説明で大変申し訳なく思う。

「わかりにくい！」というクレームは発案者の間宮に対してお願いします。

また噂の粹を出ないが、寝ている時間以外は怒っている、といわれる。

噂の根源は、その眉間の皺である。

怒りっぽいせいか、林は眉間に皺を寄せることが多い。

あまりに眉間に皺を蓄えすぎたせいか、眉間には世界で一番深いマリアナ海溝に匹敵するほどの深い皺が常設される事となった。

普通の顔、眉間に皺を寄せない顔をしていても、「え？怒ってる？」といわれるそうだから、その程が伺える。

無論烈火のごとき心を持つ林である。

そんなことを言われるとまたもや機嫌が悪くなる、という按配である。

なんという無間地獄。

早々に解脱せねば、林は怒りの輪廻の中、己の身を焼き尽くすだろう。

怒りっぽい人にはカルシウムが良いと聞くが、はたしていかがか。

さて、他の貴族どもと同じように、林も様々な逸話を持つ。

しかし林の場合は、その行動の根源が怒りということもあり、あまり人様にお出しできるような逸話がない。

例えば、

「小学校時代、校長の話が長い！と怒り、登校をボイコットした。」
「大学時代、あまりにふがない大学の講師をこれでもか論破し泣かした。」

「眼力だけで野生の猿を追い払った。」

「林が部屋にいただけで体感室温が2　は上がる。」

「林が横にいとチャーハンがパリと仕上がる。」

などであるが、ご紹介してもあまり面白いとはいえない。

まあ面白い逸話なんぞなくとも、妄言奇行が日常生活の一部と成り果てている独身貴族達の間にあつては、唯一のツツコミ役、良心といえ、また前回毒の沼地からの生還者である加藤に示したような男っぽい気骨ある様を見せることもある。

長々と語ったが、怒りっぱいけれど根はよいヤツ、とスッパリ一言でまとめさせていただく。

片岡については登場した時に記す。

林は今までに見せ場、円卓会議での男気発露があつたのだが、片岡には未だない、というのが理由である。

もうちよつとで登場するので全国6人の片岡ファンの方には、今しばらくお時間を賜りたい。

もう1つ理由は、早いところ会場である塚田邸に行かねば、地獄の業火で焼かれることになるからだ。

林は、いるだけでチャーハンをパリと仕上げさせるほどの高火力を誇る男である。

それが地獄の業火、というのだからその火力は筆舌に尽くしがたいなによりも、私の話は最近枝葉に集中して、時間を忘れるくらいがある。

さっさと行動を開始せねば、時既に遅し、となりかねない。

塚田邸はここより徒歩で15分ほどである。

車で行ってもよいが、それでは近すぎるし、最近のガソリンは非常に高い。

経済的事情を考えれば、歩いていくのがよいであろう。

窓から空を見れば麗らかな散歩日和である。

私は自らの足で大地を踏みしだきながらで向かうこととした。しっかりと大地を踏みしだきながら、と書いておいてなんであるが、普通にスニーカーを履き、ペタペタと歩き塚田邸に向かう。

さて以前にも書いたが、歩くというのは頭の回転を良くする作用があるそうである。

そしてそれは実感としてもある。

これからは少し散歩を趣味とし、麒麟児の頃を思い出すのも悪くない、と思う。

ペタペタと歩き、クルクルと頭が働き出す私。

とりとめもない様々な考えが頭をよぎる。

少し前、塚田家は父、母、塚田、妹の4人家族であると聞いたことがある。

母と妹については面識はないが、本人の言であるから、まあ間違いないであろう。

流石の彼も、自分の家族構成に有益な情報、とはいわなかったし。

なお妹の部分で思考がロツクされた方は、今すぐ腹を搔つ捌き、モツ大放出のモツ祭りでも催していただきたい。

よくよく考えてみれば、これから向かう塚田邸には、少なくとも貧乏神とぬらりひょんという妖怪が潜んでいる。

再度再度申し上げるが、それほど面識のない塚田父を勝手にぬらりひょんと呼ぶ無礼は重々承知の上ではある。

しかしあのぬらりひょん具合というのは、私の筆力ではとうてい書ききれない。

言葉で表すならば、文字通り「絵に描いたような」が最も近い。

あそこまで見事なぬらりひょんは、古今に比類なし。

むしろ某妖怪マンガの大家は、塚田父をモデルにしたのではないだろうか？と疑ってしまう。

はてさて、家族4人のうち半分が妖怪、という事実は何んとも面妖である。

母殿と妹殿については面識はないが、まさかそのお2人も、と考えるのは私だけだろうか。

妖怪に身をやつしたものは引かれあう。ないとは言いつれない。

いやむしろ今までの私の人生、流れを鑑みれば、その可能性が高い。あまりにも珍妙な人物との出会いが多い人生である。

どうせなら妹殿は、雪女であっていただきたい。

出来れば黒髪でお願いしたい。

さらに読書好きであって頂きたい。

私の人生には、そういうサービシ的キャストが少ないのである、いやむしろ皆無。

もし神がいるのであれば、そんな果実のようなキャストくらい望んでも罰は当たらないであろう。

いい加減、男地獄からの生還を果したい。

これは私の切なる願いであるが、いくら陳情しても、蜘蛛の糸は垂れてこない。

あ、蜘蛛の糸をたらしたのは、神ではなく仏であつたか。

これは祈る対象を神から仏へ変えねばならぬ。

かくして私は塚田邸に到着した。

さて、ここまでの私の言をまとめると、モツ祭りを催さねばならないのは、私自身であるような気がしてきた。

私はもう少しだけ男地獄生還のチャンスを待ちたいので、陪審員の皆様には温情ある判決を賜りたく存じます。

天邪鬼 その2

そうこうしているうちに、私は円卓会議開催場所である塚田邸に到着した。

私の腹部から何も放出していないことを見るに、陪審員の皆様よりモツ祭り判決はいただかなかったものと思われる。

ご厚情痛み入ります。

しかしながら、15分ほどの歩行で足腰がギシギシしてしまうのは、陪審員の皆様より軽い刑罰を受けた現れであろうか。

日ごろの運動不足の可能性も強ち否定出来ない。

塚田邸は、塚田父が建築会社の経営者なのだから、それは立派な邸宅、庭には池と錦鯉が配備されており、パンパンと手を叩くと鯉が寄ってくる、そんなイメージをもたれた方がいるかもしれない。もしくは、妖怪屋敷なのであるから鬼太郎ハウスのような、棒の上に立っている茅葺小屋をイメージされたかもしれない。

そんな予想に反して塚田邸はごくごく普通の2階建て一軒家である。庭はあるが池はなく、代わりに家庭菜園が広がっていた。

いくら私が珍妙な事物に出会うとはいえ、流石に鬼太郎ハウスはありえない。

現実には時に非情であるが、時にごくごく普通なのである。

さて私は到着したことを連絡するため、塚田の携帯に連絡をした。待ち構えていたように塚田が電話に出たが、すぐさま林に変わり、林より塚田邸に入る許可をもらった。

私はこの数秒のやり取りで、家主の権利などやはり砂上の楼閣に等しい儚いものである、と確信せずにはいられなかった。

なぜ林が許可を出すのであろうか？

独身貴族円卓会議の権力とはかくもすさまじいものなのであろうか？
様々な疑問が沸き立ち、匂い立つのであるが、ともかく家に入らないことには話が始まらない。

玄関のドアを開け、塚田邸へいざ突入をしかけることとした。

「おじやまします」と声を発しながら玄関を開けると、これまた夕イミングを図ったように目の前の階段上より、ドスドスと誰かが降りてくる音が聞えた。

足元より少しづつ見えてきた人物は、その巨大なシルエットより間宮であるに間違いがなかった。

ドスドスと降りてくる間宮、足音がだんだんと大きくなっていく。階段を降りきるまで後２段と迫り、そこに間宮が足を乗せたとき、階段よりミリツと、なにか裂けるような嫌な音がした。

私と間宮の時間が止まった。

ビジュアル的には、瞬間的に、色が失われて灰色の世界になったとイメージしていただきたい。

時が止まってよりたつぷり５秒、もっとも時が止まっているのだから時間の計測は出来ないのだが経過し、時間が動き出し色も戻った。

「やあ」と声をかける私。

「皆集まっているのでともかく上に」と会場への来場を促す間宮。
私達は、独身貴族円卓会議会場、２階にある塚田の部屋へと向かった。

階段を上りきるその数秒、私と間宮は無言であった。

その数秒の間に私の心には、「優しさというのは一切触れないことなのではないか？」という疑問が浮かんで、すぐさま消えた。

そして会場到着。

独身貴族円卓会議、またの名を男地獄。

塚田の部屋に到着をした私を待ち受けていたのは、例のごとく車座になって座っている独身貴族どもと、牛井の芳香であった。

また牛井なのか、と思われるかもしれないが、牛井は男地獄名物なのでご勘弁願いたい。

いや、別にそういう風に決まっているわけではないが、まあなんとなく話の流れで、そういうことにしておいていただきたい。

私と間宮が部屋に入っても、皆、目配せした後は、すぐに牛井に意識を向けた。

都会よりも他人に無関心なやつらである。

主催者の林は眉間に皺をよせ、ただただ黙々と牛井を口に運んでいた。

本当に寝ているとき以外は眉間に皺がよっているんだ、と思わずマジマジと顔を見てしまいそうであった。

しかし男の顔をマジマジと見るというのも、なんとも気持ち悪いので止めておいた。

家主の塚田をみれば、なぜかいつも以上に顔色が悪く、今にも故郷の金星に帰りそうである。

塚田の顔色の悪さは、私が今現在感じている息苦しさ起因しているのかもしれない。

ここは二酸化炭素の濃度でも高いのであろうか。

林の怒気と間宮の体温から発している熱気、そして他の貴族から発せられるんだか得体の知れないどす黒いオーラが酸素流入を妨げているのであろうか。

もしそうであるなら、素晴らしく地球に優しくない集団、と言わざるを得ない。

即刻政府に、非エコ集団がここにいます、と通報しなければならぬ。

環境税でも課税されるべきだ。

さらにその有様は、もう独身貴族円卓会議という呼称はやめて、男地獄という呼称を使うべきではないか？と疑問を持たずにはいられなかった。

もう諦めてそれでよいではないか。

しかしそうになると、「なんでわざわざ地獄の亡者どもを招集し男地獄を創り出すのか？」という新たな難問が生まれるため、呼称はやはり独身貴族円卓会議で行こう、と改めて心に誓った。

ここにいるのはまさしく地獄の亡者どもであるが、地獄だ沼地だと騒ぎ立てるのもいささか自嘲気味過ぎる。

少し現状を把握し、よいところでも探してみよう。

先回、加藤がこの男地獄より生還し、現在亡者は6名。

どこをどう見てもいずれ劣らぬ猛者であり、厳選された亡者、そして大罪を背負った咎人である。

そういう言い方をすればマンガや小説に登場する、「異能者集団」によくあるパターンとも言える。

その異能をもつて敵をばったばったとなぎ倒すのだ。

しかし残念なことに、特殊な能力があるわけでもなく、別に体に紋章が浮き出てくるわけでもない。

能力も無いから隕石が降って来たとしてもなんとも出来ない。

別に敵対する組織、例えばそれはカノッサ機関という名前の組織があるわけでもない。

やはりどう考えても、ただの毒の沼地であり、まったくもって不毛な考えであった。

さらに、改めて私の脳は、本当に麒麟児であったのかと疑問をもたずにはられない。

私は地獄に吞まれ、深遠を覗き込みそうになった。

このままでは私の精神が危ういし、なによりも立ちっぱなしなのもなんであるので、私は今回の主役兼脇役の片岡の横に陣取り、牛井を胃に押し流すこととした。

胃に何かを入れれば、少しは元気もするというものである。

片岡について色々記す。

私は皆様に、元麒麟児である、とのたまっている。

今までの言動で疑問はもたれるかもしれないが、ここはそういうことにしておいていただきたい。

さて、そういう意味では片岡はまさしく、麒麟児を超えた神童と言える。

片岡家は先生、学者の家系であり、先祖代々頭は良い。

片岡の父は某大学で教鞭をとっているのだから何分説得力がある。何故それを知っているかという、私は大学時代、片岡の父の講義を受けているからである。

当時の私は、友人知人の父とそういう形で出会ってしまうとなんとも尻の座りが悪いものであることを知った。

あれはですね、なんともいえない気持ちがするものですよ。

さて、そんな家系という事もあいまって、おおよそ勉強座学という領域において、片岡を超えるものはそうはいまい。

高校時代の成績は当たり前のように学年トップであり、さも当たり前のように日本の最高学府へと進学をした。

もちろん浪人などしていない。

そんな絵に描いたような秀才である片岡が「なぜ無職なのであるか？」と疑問をもたれる御仁も多かるう。

私達は、マスコミがいうところの「失われた10年」に青春時代をすごした。

就職が厳しい時代でもあったし、私自身もそれは体験をしている。

そんな時代のせい、と言ってしまえば一件落着なのかもしれないが、片岡の場合どう考えてもそうではない。

学歴は申し分ないし、コミュニケーションが取れない、とか、鼻が高すぎる、とか、オーラが禍々しいというわけでもない。

むしろ、就職について言えば、私なんぞよりもよほど恵まれている性能である。。

オーラについては、金髪か和服のスピリチュアルな方にご判断願いたい、少なくとも私は中村より禍々しいとは感じない。

「ではなぜ？」とやはり同じ疑問が浮かんでくる。

実は私も本人から、その疑問に対するはつきりとした答えを聞いたことはない。

「なぜ？」と聞けば、「なんでだろう？」とはぐらかされてしまうからだ。

おそらく林がやきもきしているのも、そのはつきりしない所が原因ではないだろうか？

一つだけハッキリしているのは、彼は働く気が1mmも無い、ということである。

それはもう綺麗さっぱり、小坊主が舐め取った水飴の甕、のようにからっぽである。

これは林の言であるが、「働かないと食えんぞ」と忠告したら「働くくらいなら食わん」と、それはもう、剣豪の一太刀のようにバツサリ言われたそうである。

昨今ニートという言葉が大流行であるが、その言より彼はまさしくプロのニートといえる。

ニートに人生をかけているのだ。

いつそ天晴れ、行ける所まで突き進んでくれ、そして俺達に希望をくれ、と拍手喝采で送り出したいほどのフロンティアスピリッツである。

目の前に広がるは、荒涼たる大地かはたまた無限の可能性か。雲や霞を食って生きていけるわけではない、とよくいわれるが、い

やはりプロの二トであれば雲や霞をくつても生きていけそうである。

立派な妖怪、いや、むしろ仙人である。

そういえば風貌も少し仙人に近いかもしれない、と思いつた。

塚田と同じように、長身痩躯というより細長いシルエツト、長髪、ヤギ髭、温厚そうな目。

あとは山伏のような装束と杖でも持たせて、山にでも放り出せば立派な仙人の一丁上がりである。

ついでにほら貝でも持たせたいところであるが、それでは仙人ではなく、本当に山伏であるので止しておく。

改めて記すが、私は仙人といえども男地獄からは逃れられないものと知り、男地獄の恐ろしさを再度確認し、その事実には戦慄を覚え奈落の底に落ちていった。

急募、明日に繋がる希望。

奈落の底もいい加減飽きてきたので現実に戻ることとする。

現実に帰還した私を迎えたのは、牛井の咀嚼音とその芳香、そして恋愛亡者どもであった。

皆、一心不乱に牛井と肉弾戦を演じている。

その肉弾戦の中でもやはり群を抜いて戦績がよいのは間宮であった。私が奈落観光ツアーに参加している間に、牛井を2杯やつつけているようである。

その歴戦の勇者、国土無双っぷりはまさしく三国無双である。

三国無双と言ってはみたものの、唐と天竺に牛井があるかどうかは定かではない。

私はその三国無双な戦いっぷりの迫力に気圧され、何気なく横にいる片岡に目を向けた。

片岡も一心不乱に牛井と格闘をしていたが、どうにもそのヤギ髭が邪魔をして苦戦をしているようである。

切ればいいのに、と髪の毛とラーメンと一緒に食べている女性を見つけたときと同じ感想を抱いた。

苦戦しながらも、片岡は牛井の最後をゾルズルと口の中にかっ込んだ。

食し終わり、カップより覗いたそのヤギ髭には紅しうががくっついていた。

その光景はそこはかかない面白さと、なんとも言えないやるせなさを醸し出していた。

周りを見渡せば、あと自分の受け持ちをやっつけていないのは私と林だけであった。

あとのモノは食後の余韻に浸っており、中村に至っては口元が綻んでいた。

いや、言葉を正確に使うのであれば、中村の口は明らかにニヤリという擬音を発していた。

いずれにしても、やはり満腹は人の心を癒す。地獄にも一服の清涼剤である。

私は自分の目の前に置かれた牛井を口に運ぶことにした。

モソモソと牛井を口に運び、そして腹に収める私。

私最後の1口を口に入れた瞬間、牛丼を食し終わった林が「よしっ！始める！」と声をあげた。

その声はやけに大きく、皆を林に傾注させるのには十分であった。そして私を驚かせ、むせさせ、鼻の裏側を米と牛肉で痛打させるのにも十分な声量であった。

私は筆舌に尽くしがたい苦痛と戦いを演じることとなり、精神が冬場のささくれのように尖った。

涙と咳を噴出しながら悪戦苦闘する私を尻目に、独身貴族円卓会議は始まることとなった。

そのとき、片岡の髭に付いた紅しようがが一瞬だけ光ったように見えた。

はたして私の涙がそのように見せたのであろうか。

それともこれから始まる波乱の会議を予言していたのであろうか。

天邪鬼 その3

さて、前回も議事録を記載させていただいたのだが、今回も同じように記載させていただく。

この形式が読みやすいのかはさておき、時系列としては分かりやすいのではないと思われる。

それでは以下議事録をご覧いただきたい。

【私】つまり…（ゴフッ）片岡を…（ゴフゴフ）…いかにして働かせるか？（カーッ!）というわけだな？

【林】そういうことだな。

【片岡】無理。

【間宮】無茶。

【中村】終了だな。

【間宮】じゃあ以降この会議はおれが乗っ取らせていただく！

【中村】任せたぞおおおお！間宮あああああ！

【片岡】ちょーっとまったあああああ！！

【中村】おお！ちょっと待ったコールだあ！？

【私】いやいや、いくらなんでも古過ぎないか？いつの時代だよ？

【間宮】うーん…バブル時代？

【林】またもや話が進まねえだろうが！？

【間宮】確かにそうだ。

【私】この前は何で進まなかったんだっけ？

【中村】確か、ケイオスとふんどし。

【私】…振り返っちゃいけない過去ってあるよな。

【片岡】まあ世間の皆様に胸を張ってご提供できるものではないな。

【中村】まさしく同感。

【間宮】うん。時間の無駄、黒歴史。

【林】わかってんなら少しは前向きな発言をしろ！

【片岡】いやあ、時間という貴重なリソースを、どぶに捨てている
感覚がなんともステキなんじゃないの？

【中村】一理ある。二理もある。

【林】二理はねえだろーが！

【私】さすがに世間一般から見ていかななものか？

【片岡】 まあ楽しければよいではないか。よいではないか。

【間宮】 悪代官みたいな発言だな。議事録にしっかりと載せておこう。ところで片岡、髭になんかついてるよ。

【片岡】 ん？…ああ、つけてんだよ。

【私・中村・林】 ウソつけ！！

【間宮】 いや、片岡ならあるいは

【林】 そこまでだ！

【間宮】 おお！一生のうちで一度は使いたい「そこまでだ！」を使
うやつが出てくるとは！

【中村】 まさか林が「そこまでだ！」の使い手だったとは…

【間宮】 ぬうつ！？知っているのか中村！？

【中村】 うむ…実は

【片岡】 そこまでだ！

【私】 あ、使いたくなっただんな。

【片岡】 うむ。これで思い起こすことは何も…ない…

【中村・間宮】 片岡あああああ！！

【林】いや、話を前に進めろや！！目的があるだろうが！！片岡の就職だよ！！

【片岡】ふふ…果たしてそうかな…？

【私・中村・間宮・林・塚田】？

【片岡】まさか真実は別のところに転がっているとは…

【私・中村・間宮・林・塚田】？？？

【片岡】いいだろう…君の本当の目的！！僕が暴いて見せる！！

【私・中村・間宮・林・塚田】！！！！！！！！！！？？？？？

これが後世語られることになる、逆転の独身貴族円卓会議の始まりの合図であった。

いや、こんなもの語り継ぐな、という叱責はご勘弁願いたい。

私自身もそう思うから。

そうすると片岡はおもむろに手近にあった塚田のパソコンを操作すると、あるBGMを流しだした。

どこかで聞いたことのあるBGMだと思ったら、ゲーム「逆転裁判」の「追求」という曲であった。

ご存知の方は脳内で流し、ご存知で無い方はサントラなどでお聞きいただきたいながらここからを読んでいただきたい。

【片岡】そもそも皆は違和感を感じないか？

【中村】違和…感…？

【片岡】うん。少なくとも4つの点でおかしい部分がある。それではひとつずつ考え、検証していこう。

【中村】これは面白そうだ。やらしてみよう。

【私】なんだか金田一みたいだな。

【間宮】こういうシチュエーションを待っていたのだよ！俺は！

【私】シチュエーションな。

【間宮】はい。

【片岡】よし、それでは1つずついこう。さて中村、君は以前、職場の同僚に塚田が声をかけていた、と言っていたな。

【中村】おうともさ！

【私】なんだその返事は。

【間宮】なんか水戸黄門の人夫の掛け声みたいだな。

【片岡】あれだ、籠を担ぐ人。でだ、話を進めるぞ。そのとき、どう思った？

【中村】3次元に現を抜かすなど、正しい独身貴族ではない！と思った。

【私】なんだか間違っている気もするが…。

【間宮】流石中村。ぶれないな。

【中村】褒められた！

【私】褒められたのか？

【片岡】つまりだな、次にこの会議が行われるなら、中村が主催で塚田を2次元に戻す会を行う可能性のほうが高いだろう。

【私】いや、塚田は2次元に旅立ったわけではないと思うのだが…。

【間宮】あと、中村がそう思ったからすぐやる、とは言えないだろう？あとその議題よりも今回の議題のほうが早く行われただけかもしれない。

【片岡】うむ鋭い。まさしくそのとおりだ。俺もそう考えた。

【私】じゃあ片岡。君の推理は破綻するんじゃないのか？

【片岡】いや、むしろ俺はこう考えた。今回の会議は、中村が主催する会議よりも早く、行う必要があったのではないかと。

【中村】なん…だと…？

【間宮】どういうこと？

【片岡】おいおい話していこう。さて次は2点目だ。何故塚田の家が会場なのか？だ。

【私】ん？別に変ではないぞ。独身貴族円卓会議は、主催者と会場家主が一致しないことも多い。

【間宮】実際前回、主催は塚田で、会場はこいつの家だったしな。

【片岡】まあそいつのことはいいんだ。ほうっておけ。

【私】私の扱い悪過ぎないか？

【片岡】黙殺！でだな…うーん。そうだな。とりあえず塚田を見てみてくれ。

【私】いつも以上に顔色が悪そうだ。

【中村】これはもうキュウリではない。ナスだよナス。

【間宮】浮世離れた顔色ともいえるな。

【私】浮世離れって、そういう言葉の使い方でもいいのか？

【片岡】多分それは間違った使い方だな。まあいい。いずれにしても顔色は悪い。つまり疑問とは、男気溢れる林がこの体調の悪そうな塚田の家を会場に使うのか？ということだ。

【間宮】ぬう…確かに。

【片岡】いくら我々が獄門の鬼だとしても、体調の悪い男の家を会場に使うだろうか？否使うことはない。ここ反語な。まして男気溢れ出る林であれば、急遽会場を変更する可能性が高いだろう。

【私】要は林のパーソナリティと行動に矛盾があるということか。

【間宮】言われて見れば確かにそうだ。

【中村】これは林は褒められているのかね？

【私】精一杯の賛辞だろう。特にこの会議メンバーでは。

【片岡】そして3点目。なぜ今回、塚田は一言も発しないのだ。

【私】そういえば、俺の入室許可も林が出したよな。

【片岡】いくらなんでも元気が無さ過ぎる。そしてこれが最後の4点目だ。これが一番の疑問だ。結論を言おう。いくら会議で話し合ったところで、俺が就職するわけない！

【私・中村・間宮・林・塚田】！！！！！！！！！！

【片岡】絶対にな！

【私】待て待て！三十路手前！いくら推理中とはいえ、それもどうかと思うぞ、おじさんは！就職しろ！

【片岡】いやここは断言させていただく！俺は就職はしない！当分！

【私・中村・間宮・林・塚田】働け！！！！！！！！！！

【片岡】働くくらいなら食わん！

【間宮】…これが突き抜けきったものの強さ、美しさなのだろうか…。

【私】いつそ爽やかですらあるな。

【片岡】これは林が一番よくわかっている客観的事実だ。どれだけ口酸っぱく言ったところで、俺の強固な意志は砕けない。

【私】すごい男だ…

【林】ああ。ダメな方向でな。

【片岡】さて推理を進めるが、これらの違和感から、会議の目的は他にあったと考える。

【私】しかし一向にわからんな。見えてこない。

【片岡】ふふふ…ここで発想を逆転させてみよう。

【私・中村・間宮・林・塚田】？

【片岡】目的があるから集まった、のではなく、集まることが目的だとしたら？

【私・中村・間宮・林・塚田】！！！！！！

【片岡】そして今回の会議は、中村主催の会議よりも早く行う必要

があつた。…さらには…塚田の顔色は、体調ではなく心の調子だとしたら？中村と心の調子の共通点…。そして集まることが目的…だとすれば？

【間宮】まさか！？

【片岡】そうだ！これは中村の同僚にフラれた塚田の慰め会だったんだよ！！

【私・中村・間宮】な…なんだってー！？

【片岡】おそらく数日前、塚田は中村の同僚にフラれた…そして塞ぎこんだ…。塚田が話したのか、なにかの拍子か、林はその情報をつかんだ…。男気溢れる林は、塚田をなんとか励まそうと考えた…。塚田の憂さ晴らしのために、会議を行おうと…。しかし、塚田慰め会では、心が再度折れてしまうかもしれない、と林は考えたのだ…。そこで、俺をダシに使い会議を開催した…塞ぎこんで動きたくない、塚田の家を会場にして…。以上が俺の推理だ。塚田、林、反論はあるか？

片岡の推理独演会は終了した。

塚田、林から反論が出ないということは、これが真実ということであるう。

男気あふれる林の行動に、私、間宮、中村は、涙を抑えるのに精一杯だった。

そうか、そうだったのか。

塚田よ、がんばれ、精一杯応援しよう。

そして、林。

お前はやはりいいやつだよ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3340y/>

物の怪日和

2011年12月21日18時54分発行